ヒトイヌ公園

Hitoinu park

こうえん



Yozora Sakura

夜空さくら

Tamakko

たまっこ

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

目次

ヒトイヌ公園　ひとりの場合　……2
ヒトイヌ公園　ふたりの場合　……38
ヒトイヌ公園　のら？の場合　……61
挿絵担当・たまっこ様から頂いた応援イラスト
あとがき・奥付

ヒトイヌ公園　ひとりの場合

この有料公園に訪れるのは、もう何度目だろうか。

すっかり常連になってしまった私は、有料公園の入口兼受付となっている建物の前でひとつ息を吐いた。

毎度のことながら、この受付に入る瞬間は緊張する。その都度、こうして呼吸を整え、気持ちを落ち着けなければならなかった。

あまり長い間建物の前で立ち竦んでいるわけにもいかないので、意を決して敷居を跨いだ。磨りガラスの自動ドアを抜けて中に入ると、近代的なエントランスが広がっている。一流ホテルのエントランスといわれても違和感がないかもしれない。

人の気配はなく、穏やかなＢＧＭが流れていた。

入口から見て正面、受付の中に綺麗な女の人が立っている。その凛とした立ち姿に感心しつつ、疲れはしないのだろうかと心配になった。

なにせこの『入口兼受付』の利用者は少ないはずだ。少なくとも私がこの公園に訪れた中で、他の利用者とすれ違った記憶はほとんどない。

まあ、来園者が来るまでは椅子に座っているのかもしれないし、私が心配することじゃないんだけど。

受付に向かって歩いていくと、受付の人と目が合った。

すると、その人はにっこりと笑顔を浮かべてくれた。

「ご来園ありがとうございます。鈴浦様」

もう何度も来ているから、すっかり顔と名前を覚えられてしまっていた。この公園に来ている目的を考えると少し恥ずかしいけど、仕方ないことだ。

「規定ですので確認させていただきます。こちらは特別入園の入口および受付となります。一般入園は三百メートル先の別の入口から、となりますが、入口をお間違いありませんか？」

この有料公園には、大きく分けて二通りの入園方法があった。

ひとつは、いま受付の人が示してくれた一般入園。

単純にそのまま公園に入る、というだけの入場方法で、公園内を自由に歩くことができる。

私は一般入園で利用したことがないから詳しいことはわからないけど、この公園でしか食べられない絶品スイーツや料理を提供するカフェとか、四季折々の見所に溢れた公園を堪能できる休憩所とか、特別な施設をいくつも利用できるらしい。

ただし、その利用料はものすごく高い。

普通ならどれほど素晴らしいサービスが受けられるとしても、払うことがない高額な利用料金が設定されている。

私が一般入園を利用したことがないのも、それが理由だった。私のような一般大学生ではなく、ちゃんと働いて稼いでいる社会人が主要客層らしい。

とはいえ、私からすると社会人でもかなり厳しい金額なんじゃないかなと思う。入るだけでも大変だし、施設を利用しようと思うともっと大変だ。

けれど、それでも、一般入園を希望する人は一定数いるらしい。

その秘密は、いまから私が入ろうとしている特別入園方法にあった。

緊張で乾く喉を鳴らす。

「……間違いありません。特別入園で、お願いします」

はっきりと意思を示すと、受付の女の人は神妙に頷いてくれた。

「承知いたしました。それでは、特別入園――ヒトイヌ入園で、ご案内させていただきます」

ここは、入園者の一部が『ヒトイヌ』となって楽しむための、夢のような公園なのだった。

人呼んで『ヒトイヌ公園』という。

ヒトイヌ公園には敷地を囲うように、複数の入口兼受付の建物がある。公園の受付兼入口であるその建物を通らなければ、公園内に入ることはできない。

それらの建物と建物を繋ぐように高い壁があり、敷地内の様子が外から見られないようになっている。

不法侵入への対策もいくつも取られていて、塀を越えることはほぼ不可能だ。それは逆にいえば公園内から出ることも難しいということなのだけど、どうせプレイ中は徹底的に拘束されているのだから大した差はない。

いくつか壁を越える高さのビルが敷地の近くに立っているが、それらはヒトイヌ公園と関連した企業のビルであるらしく、窓から公園内の様子を見られても問題ないようになっているという話だった。

一体どれだけ多くの人がこの公園の運営に関わっているのか、一利用者でしかない私にはわからない。

様々な形での提携企業も多いと聞くし、すごい数の人と企業が関わっているのは間違いないのだけど。

それだけの規模でヒトイヌ公園が運営されているからこそ、私たち利用者も安心できるというものだ。

そんなことをつらつらと考えつつ、私は前に立って案内してくれる職員さんの後をついて歩いていた。

受付を兼ねている建物からは公園内に繋がる扉がある。

そこから入場する前に、建物内にいくつもある小部屋で準備を整えることになっていた。

「鈴浦様、こちらにどうぞ」

私はその小部屋のひとつに案内された。

小部屋には、手荷物と脱いだ服を収めるためのロッカー

がある以外は、利用者が使うためのものはほとんどない。
ここはあくまで公園に入る準備を整えるための部屋で、寛いだりプレイを行ったりする部屋ではないためだ。
ひとりでしか公園を利用しない私にはほぼ縁の無い話だけど、ふたり以上で利用できる、プライベートに配慮されたプレイルームもあるらしい。
「着衣をすべてお脱ぎください」
「っ……はい」
職員に促されて、覚悟はしていたのに心臓がどくん、と高鳴った。
ロッカーの前に立ち、荷物を入れ、服を脱いでいく。職員は準備を始めてくれているようだった。
靴や下着も含め、全ての服を脱ぎ、すべてロッカーにしまってしまう。扉を閉めると、自動で鍵がかかった。私は鍵を渡されていないため、公園から出る時まで元の服を身につけることはない、ということだ。
お風呂でもない部屋で、何も身に付けずに立つというのは、非常に心細い感覚だった。この瞬間ばかりは何度経験しても慣れることはできない。
まあ、それ以上の格好で野外をうろうろしているので、裸程度を恥ずかしがるのもどうかとは思うのだけど。
それはそれ、これはこれなのだ。
深呼吸を繰り返し、心を落ち着ける。まだ興奮するには早すぎた。
「それでは鈴浦様、こちらへお願いします」
私の心も含めて、準備が整うのを待ってくれていた職員が、そう呼びかけてきた。
反射的に肩を震わせてしまいつつ、彼女の傍へ歩く。
私が服を脱いでいる間に、準備を整えてくれていた。
さっきまでは極普通の服装だったのに、いまは科学者みたいな白衣を羽織っている。さらに白い仮面で顔を覆っていて、表情や目線の動きも悟らせない。そして、白いゴム手袋。髪型も特徴の無い黒髪ショートカットだから、強いて個性を消す様な格好をしている。
あくまで職員は補助であり、利用者が不必要な羞恥を感じないための格好らしい。確かに仮面で表情や視線が隠されているのはとてもありがたいことだった。
表情や声の特徴を消してくれているから、必要以上にその「人」を意識することがないのだ。
あくまでも私がヒトイヌになるために必要な装備を装着する、サポーターに徹してくれている。
それでも一応淑女の嗜みとして、手で胸と股間を隠しながら職員に近付く。
職員はずらりと道具を机に並べていた。
「今回装着させていただく器具をご確認ください。間違いありませんね？」
ぞろりと並んだ道具一式。私はそれをこれから全部身に付けることになる。どれも私にとっては見慣れたものばか

りだ。いや、一部そうじゃないのも混じっている。
胸を押さえた掌から、激しい鼓動が感じられた。
喉の奥がひりついて、上手く声が出ない。仕方なくゆっくり頷くことで道具が揃っていることを伝える。それを受け、職員が一つ目の道具を取り上げた。
「では、まずはこちらをご着用ください」
淡々とした指示と共に差し出されたそれは、首から下を完全に覆うラバースーツだった。
手渡されたそれはずしりと重く、ラバーと素肌の擦れる感触に思わず身体が震える。特別ラバーフェチというわけではないのだけど、この感触は何度感じてもクセになる。
ラバースーツを広げてみると、ぴったり私の身体と同じくらいの大きさだった。このラバースーツのみならず、この公園で支給される道具は、二度目以降の来園時にはすべてフルオーダーで揃えられているという。
利用料として、それなりにいい値段を払ってはいるのだけど、明らかに釣り合わない。もしもこの公園の外で同じプレイをしようと思って道具を揃えたら、ゼロの個数が二つ、下手したら三つは違うはずだ。
無論、自由に持ち帰れるわけじゃないし、利用料は来る度に払わなければならないから、いつかは回収できるのかもしれないけど。保存やメンテナンスなどのことも考えると、とても割に合っているとはいえないだろう。
まあ、採算に関しては色々あることを知っているし、私が気にしても始まらない。貴重なものを用いたプレイを存分にできる悦びを噛み締めさせてもらうだけだ。
そう思いつつ、私はラバースーツを着始める。ラバースーツは背中側が腰の上くらいまでジッパーで開くようになっていて、そこから身体を入れていくようになっている。
まずは足を通した。
キュッ、キュッ。
ラバー特有の音を立てながら、身体がラバーに覆われていく。予め薄く潤滑油が塗られていたのか、普通より簡単にラバーが素肌を覆っていった。
ぴちぴちと足が引き絞られ、すごくスタイルが良く見えた。
膝まで入れたあたりで、ラバーの摩擦によって引っかかってしまう。そこですかさず職員が手を貸してくれて、両足は完全にラバーに覆われた。軽く膝を擦り合わせると、ラバー越しに想像以上の刺激が走り、思わず太股の辺りに力が入る。
さらに職員に手伝ってもらいつつ、腰の上までラバースーツを引き上げる。すると、お尻はぴっちりとラバーに覆われ、張りのある感触はそのままに、見た目はテカテカとラバーの光沢が映えるようになった。お尻のラインが妙に艶めかしく感じる。
この公園に通うようになってから、ボディラインはかなり気を遣って整えるようになっていた。普段から食事制限

や適度な運動を心がけるようになったのも大きいけど、実はこのラバースーツ自体にも秘密があるんじゃないかと思っている。それに加えて、これを着た状態でとても激しい運動をするようになったからかもしれない。

原因は色々だろうけど、同性の友達にも褒められるようになったのは素直に嬉しかった。秘密を聞かれても応えてあげられないのが悩みの種ではあったけど。

具体的に「ラバースーツを着て、ヒトイヌプレイで運動していたらこうなった」と普通の人に言えるわけもない。

私が変態扱いされるだけならまだいいけど、万が一にでも公園に迷惑がかかったりするのはごめんだ。

ともあれ、おへそから下の下半身はラバースーツに覆われた。ぴっちりとしたサイズなので、股間までしっかり覆われているのがはっきりわかる。

さらに、股間からはラバーとは違う感覚もしていた。

ジッパーがそこにあるのだ。このジッパーは背中にある脱ぎ着するためのジッパーとは違う役割を持つ。

ひとまず、そっちは後回しだった。

「スーツの袖に腕を通してください」

職員の指示に従い、まずは左腕からスーツの袖に通していく。

指先ひとつひとつ、奥まで挿し入れたあとは、弛まないようにしっかりラバーを抑えていく。

このスーツは伸縮性能が非常に良い。足やお尻もそうだけど、手は特に、指先の一つ一つまでしっかり締め付けられている感覚がある。血流が止まるということはいうことはなく、程よい圧迫感が心地良い。

まだ全身を覆われているわけでもないのに、ラバースーツに包み込まれているような感覚だ。

右手もスーツに差し込んでいく。左手がすでにスーツに覆われているから、中々難しかったけど、職員が手早く手伝ってくれたので、右手も左手と同じようにスーツに通すことができた。

「両腕を左右に伸ばしてください」

指示された通り、私は両腕を左右にまっすぐ伸ばした。

私の身体がTの字を形取ると、職員が私の背後に移動して、背中が開いているラバースーツを引っぱって、隙間を埋めていく。

そうすると、私の身体の前面にラバースーツが密着してきた。お腹周りやみぞおち、そして胸にラバーが密着してくる。

「ひゃっ」

冷たい感触に思わず背中を丸めてしまうが、職員が私の肩を掴んで背筋をまっすぐ伸ばすように促してくる。

ラバーは最初冷たかったけど、すぐに暖かみが感じられるようになる。私がラバーの感触が好きだということも大きいのだろう。

そんな風に、ラバー独特の感触に身を委ねていると。

「失礼いたします」
職員がそう断ってから、ラバースーツの中に手を入れてきた。
脇腹の辺りから前面に手が回ってくる。片手でラバースーツを引っぱりながら、純粋に乳房の位置を調整してくれているというのはわかっているけど、ゴム手袋をつけた彼女の手が乳房を触ってくると言うのは、奇妙で背徳的な感覚だった。
「ふっ、う、う……」
あくまでも事務的な手つきであり、職員の動きに淀みはない。声が出そうになるのを私が堪えている間にも、彼女は淡々と位置調整をしてくれていた。
その事務的な対応もまた、私を興奮させる一助になるのだった。
位置調整が終わったのか、職員の腕が抜かれる。もっと弄って欲しかった、と願うのはいけないことなのだろう。
彼女はあくまで職員であって、私のご主人様ではないのだから。
(そう考えると……装着を手伝ってくれるご主人様がいてくれたら最高よねぇ……)
公園では一時的なご主人様を募集することも出来る。
私はまだそこまでの踏ん切りが付かずにそのシステムを利用したことはないけど、いつかしてみてもいいのかもしれない。
とりあえずそれはそれとして、今日は飼い主のいないフリーのヒトイヌとしてこの公園を楽しもう。
私が密かにそう決意を固めていると、職員から声がかけられた。
「ジッパーをあげていきます。違和感や痛みなどございましたら、ご遠慮なくお申し付けください」
「は、はいっ」
いよいよだ。ごくりと生唾を飲み込んだ。私の返答を受け、背中のジッパーが引き上げられていく。
ジッパーが上がる時に生じる、ジッパー特有の、ジジジという小さな震動が背骨に沿って全身に広がっていく。
さらに、ジッパーが引き上げられて行くにつれ、スーツの密着度がどんどん増していく。お腹、みぞおち、肋骨、乳房、鎖骨、と徐々にスーツが張り付いてくる。
このラバーに覆われて、締め上げられていく感触は何度体験しても慣れるようなものではなく、その度に凄まじい快感を覚えてしまう。
自分の身体であることは間違いないのに、ラバーに一枚覆われるだけで自分の身体じゃ無くなるようだ。
まるで、違う何かに『変身』しているように、全然違う感覚になる。
ジッパーがうなじの辺りまで引き上げられた時には、私の心はすっかりラバースーツによって仕上げられていた。
ラバースーツは首の中程までを覆っている。もちろん呼

吸には支障がないレベルだけど、ほんのわずかに締め付けられているような息苦しさはある。
　快感が身体の中心とあそこから全身に広がっている。興奮するあまり、手の指先が震え、膝がかすかに笑っていた。許されるなら今すぐこの場にへたり込んでしまいたいくらいだった。
　何度も深呼吸して、自分の心を落ち着けなければならなかった。けれど、そうやって深呼吸をして胸を膨らませると全身を被うラバーがまたピチピチと音を立てて私を締め付けてくる。
　スーツを着ただけだというのに、頭がくらくらするほどの快感を覚えていた。
「鈴浦様、こちらはどうなさいますか？」
　すでにいっぱいいっぱいの私に追い打ちをかけるように、彼女が示して来たのは『首輪』だった。
　その首輪はよく見かける犬の首輪とは違って、金属で出居ている。肌に触れる部分にはちゃんとクッションとして当て布がされている。全体が金属で出来ているために、見た目の圧迫感は相当なものだ。
　このヒトイヌ公園内において、首輪はとても重要な意味を持つ。ＧＰＳ機能が搭載されていて、時間になれば公園のどこにいても職員が回収しに来てくれるし、ＩＣチップが内蔵されているとかで、ヒトイヌ状態のままでも施設を利用することが出来るようになっている。
　他にも様々な機能があるそうだけど、私はそこまで詳しく知らなかった。
　とにかく、首輪は身分証であり、安全装置でもあるらしいので『着けない』という選択肢はない。
　職員の彼女の「どうなさいますか？」という問いも『着ける』か『着けない』かの問いではなかった。
　『自ら着けるか』
　『着けて貰うか』
　そういう問いだった。
「……着けて、ください」
　もし私に特定のご主人様がいれば、その人に着けて貰えるのだけど、私にはいない。
　ヒトイヌとして、心理的に最も重要だと思っているそれを、自分の手で着けるのは、なんというか寂しい、という理由で。
　私は毎回、職員に着けてもらっていた。
「了解いたしました。失礼いたします」
　再び私の背後に回った彼女が、私の首に手を回し、首輪を巻く。
　カチン。
　あっさりと、首輪は巻かれた。
　大きな圧迫感と、小さな金属音。首輪が私の首に巻き付いて、外れなくなった音が首から響く。
　首輪はラバースーツと肌の境目をきっちり覆ってしまっ

ていて、これで私は仮に刃物を用いたとしても、首輪を外すまでラバースーツも脱げなくなった。
「お帰りの際に外させていただきます」
つまり、それまでは自分の手では決して首輪は外れないし、ラバースーツを脱ぐこともできないということ。
そうして与えられる不自由こそ、私を興奮させる大事な一因なのだ。
ご主人様のない身にとって、これだけでもこの公園に来る理由になる。
首輪は私の首をしっかり覆ってくれていて、俯こうとすると顎の下に首輪が辺り、必然的に俯き憎くなっている。
逆に上を向くことに関しては、首の後ろ側の幅がわずかに短く調整されているのか、真上を向いても首輪が邪魔になることはなかった。
この首輪を身に付けていると、ヒトイヌとして四つん這いになったとき、顔を上に向ける癖が自然と身についてしまうのだった。
どこまでも巧妙に仕組まれている。明確な言葉はひとつもないのに、調教されているような感覚にさえなる。
そんな風に躾けられ、囚われている感覚に快感を覚え、身体が震えてしまうのだ。手足の震えが止まらない。
「続いて、四肢の拘束に移ります。四つん這いの姿勢になってください」
職員の淡々とした命令に、これ幸いと従った。興奮のあまり、足が限界だったのだ。
もう少ししていたら、命令がなくてもへたり込んでしまっていただろう。
両肘と両膝を床に付いた姿勢は、這いつくばるという表現が的確だった。
ラバースーツに首輪のみ、という格好で床に這いつくばるのは、まるで奴隷になった気分だった。
けれど、職員の顔を見上げ、見下ろされる視線を感じた時、私の胸中にこみ上げてきたのは、奴隷ではなくヒトイヌとしての気持ちだった。
一時的ではあっても、自分の世話をしてくれる彼女がご主人様のように感じられる。
こう感じる人が多いから職員たちは極力個性を消しているのかもしれない。個々の職員がご主人様として認識されたら色々支障が出てしまいそうだものね。
それが正しいか正しくないかはおいて、職員はさらに作業を進める。
「次はこちらですね」
次の道具は、私の四肢をヒトイヌの四肢とするためのクッション付き革袋だった。
両手両足を折り畳んだ状態で拘束し、二足歩行で立ち上がることも出来なくするための道具。
人ではなく犬なのだから、当然だった。
手足を限界まで折り曲げた上で、肘と膝の辺りにクッシ

ョンを当てられる。
クッションは私の折り曲げた肘と膝をすっぽり覆う形になっていて、肘と膝を突いて歩いても痛くならないようになっていた。
そこからクッションと一体化している革の袋が広げられて、私の二の腕や太股を覆う。その袋の口にはベルトが着けられていて、それが引き絞られると、私の手足は折り曲げた状態から伸ばせなくなった。
さらに、袋の口には背中側を通し、反対側の袋に繋げるための革のベルトがあり、それが適度に引き絞られると、私はどう足掻いても四つん這いのヒトイヌ状態から逃れられなくなった。
指先は拘束されていないのだけど、何かに触れたり、弄ったり出来る状態ではない。
全身をラバースーツによって包まれ、四肢を革の拘束具によって覆われ、四つん這いで動き回ることしか出来なくなった。憐れなヒトイヌがここに生まれた。
「はぁっ……はぁっ……」
全身から感じる不自由な感覚。身体を捩っても、手足を伸ばそうとしても、必ず身体を覆うものが邪魔をする。
普通の人が置かれたなら、その状態から逃れようと暴れるのだろう。そうして体力を使い果たし、それでも逃れられない拘束に絶望するだろう。
けれど、それを自ら望んだ私は、静かにその不自由に甘んじていた。身体を揺するのも捩るのも拘束から逃れるためではなく、拘束を感じるための動き。全身で不自由を感じるため。
ラバーに覆われたあそこがものすごく熱くなっている感覚がする。そしてもう二点。胸の頂点に位置する敏感なあそこが、ラバースーツと擦れ合ってささやかながら甘い快感を生み出している。
洗い呼吸を繰り返しながら、快感に浸る私はどんな顔をしているのだろうか。
この部屋には鏡がないから正確なことはわからなかったけど、さぞかしだらしのない顔をしていることだろう。
まだ全ての道具を装着し終えていないというのに、私の心はすっかりヒトイヌに堕ちていた。
けれど、私にはまだ喋る自由もあるし、表情で人間らしい感情を伝えることもできる。ヒトイヌというにはあまりにも人間的だ。
次に装着するものは、そんな私の『人間らしさ』を奪い去るものだった。
「続きましてこちら……口枷と全頭マスクを装着いたしますね」
取り出されて来た物は、ラバーで出来た口枷と全頭マスクだった。
その全頭マスクはただののっぺりとした全頭マスクじゃない。全体的に犬のフォルムをした特注品だった。

この公園では、口枷やマスクの着用をするかは自由となっている。
ご主人様のいるヒトイヌなら、あえて口は自由に使えるようにしておいて、ヒトイヌ自身の意思で言葉を使わせないようにするのも、プレイの内だからだ。
ご奉仕も、マスクがないほうが楽に出来るし。
けれど、それはご主人様がいればの話。私には言葉を剥奪して見張ってくれるご主人様がいない。だから私には強制的に言葉を奪い、ヒトイヌにしてくれるその口枷とマスクの装着が必要だった。
「口を開けてください」
職員に命じられ、私は口を大きく開く。
口枷はバイトギャグのようでいて、構造的にかなり変わったものだった。具体的には噛み締める棒状の部分から口内に向けて舌を抑える突起がある。突起は喉の奥手前まで入り込んできて、舌が完全に抑えられてしまい、うめき声しかあげられなくなる。
噛み締める部分の左右からはストラップが伸び、頭の後ろで金具を固定することで、口枷は固定された。金具には鍵を掛けることができるようになっていて、仮に手が自由だったとしても、それを外すことは私にはできない。
「ウー……ウゥウ……」
試しに声を出そうとしてみると、口内を支配する口枷によって意味のある言葉にはならない。
犬の唸り声のような声しか出なくなる。
だんだんと自分が犬に近付いていることに、身体が勝手に悦びを感じてしまう。
そして、いよいよ全頭マスクが被せられる時が来た。
「失礼いたします」
職員が手早く私の髪をまとめ、水泳キャップみたいなもので覆ってしまう。その上から、犬の頭部を模したマスクが被せられた。
マスクを被せられると目の部分以外、頭部のほとんどがラバーに覆われた。目の部分も、空いているとはいえ、かなり視野が狭まる。
この全頭マスクは、頭の上に犬の耳を模した飾りがあった。本来の耳はラバーに覆われて隠されている。ラバーの影響でちょっと聞こえにくいものの、メッシュ構造になっていて完全に音を遮断してはいない。ノイズが程よく遮断され、心地いい静寂を私に与えてくれる。
口の部分は一番構造として変わっていた。少し出っ張っていて、犬の口の形に似せられていた。しかも、この部分は先に噛まされた口枷と、機能的にも繋がるようになっている。
口枷を噛み締めると、噛み合っている上下の顎が開くようになっているのだ。これを上手く使うことで、犬がそうするように、ある程度の重さと大きさの物なら咥えて運ぶことが出来る。

これは公園内でボール遊びなど、いわゆる『犬の遊び』に興じるための機能だった。あいにく私にはボール遊びをしてくれるご主人様がいないけど、何かと便利なのでこの口枷と全頭マスクを愛用している。

頭に被せられた全頭マスクの、後頭部側にあるジッパーが引き下ろされ、全頭マスクが私の頭部と完全に一体化していく。

頭全体が均等に締め付けられ、全頭マスクが私の身体の一部になる。ラバースーツもそうだけど、ラバーは密着すると第二の皮膚みたいになるのが好きだ。

ジッパーの金具は一番下げた状態で取り外せるようになっていて、取り外してしまえば全頭マスクを脱ぎたくても脱げなくなる。

もう十分すぎるほど拘束され、ヒトイヌの形に閉じ込められているのに、より徹底的な拘束を求めてしまうのは、私がそれを望んでいるからだ。

「違和感のあるところはございますか？」

職員の質問に首を横に振る私。

苦しいかどうかを訊かれたなら頷くしかないけど、いまのところ違和感はなかった。

私の返答を受けて、職員が頭部に取り付ける最後の道具を手に取った。

それはヘッドセットのように耳を覆うものだ。

すでに十分音は遮断されているのだけど、それを耳に被せられることで、完全に音が聞こえなくなる。しかし、ずっと聞こえないわけではなく、職員が何らかの操作をすると、元の通り周りの音が聞こえてきた。

ただし、その音は通常のように耳から聞こえてくるのではなく、頭の上から聞こえてくるように感じる。まるで本当に犬耳で音を聞いているように錯覚してしまうのだ。

そこまでする必要があるのかは疑問だけど、本当に犬になったみたいだと感じることが出来るので、無駄ではないのだと思う。

また、このヘッドセットには側面に特別な刻印・マークを入れることが出来る。私はそこまで拘っていないからヒトイヌ公園が提供してくれる「犬の肉球」みたいなマークのままだけど、個性的なマークにしている人もいる。

公園内ではヒトイヌ拘束されている状態だし、そうしようと思わない限り、個人が特定されることはない。それはプライバシー保護や公園外での安全性を考えれば良いことなのだけど、公園内での「友達」が作りにくいということでもある。

そこであくまで希望者だけの話だけど、ヘッドセットの側面のマークを個性的な物にすることで、「公園内での個体の特定」が出来るようにしているのだ。

マークはデフォルト以外の重複が禁じられているので、マークさえ覚えれば別のヒトイヌと間違えることはない。

本当に良く出来ているものだと思う。

それは口枷やヘッドセットなどの機構や、マークによる個体特定の仕組みだけじゃなく、純粋なヒトイヌ拘束の負荷の少なさという点でも、だ。
何時間でも、何日でもこのままで居られそうな気がするのだから。
願わくは、これが自分の意思ではなく、大事に飼ってくれるご主人様の意思で行われることなら、より最高なのだけど。
そんな贅沢な願いを抱いていた私は、こうしてあと一カ所を残して「ヒトイヌ」へと成り果てた。
いまの私は、身体も五感もまともに動かず、言葉も剥奪され表情で意思を伝えることも難しい。身を捩るたびに全身を包むラバーの感触に酔いしれ、締め付けの強さに身悶える浅ましい獣でしかない。
その事実が私の心までも蝕んで、呼吸は自然と荒くなって、胸の鼓動は心臓を張り裂くばかりに昂ぶっている。
でも、まだ終わりじゃなかった。
まだ最後の仕上げが、道具を装着すべき箇所が一カ所残っている。
彼女が最後に手に取ったのは、すごく凶悪な形状をしている『尻尾』だった。
「これより、こちらを装着いたします。最後の確認ですが、使用する物に間違いはありませんね？」
すでに一度確認していたことだけど、装着する場所が場所なので再度確認を取られる。
恥ずかしい気持ちを押し隠しながら、私は誤解を生まないように、わかりやすく、大きく頷いて見せた。
前に来た時に用いた尻尾は、スーツに外付けする単なる飾りだった。それでもお尻を振る度に左右に揺れる尻尾は、犬になったのだという雰囲気を十分高めてくれるものだった。
対して、今回の尻尾はただの飾りじゃない。
視覚的に犬とするためだけのものじゃなく、ヒトイヌとして、性的興奮を加速させるための機能が備わっている。
一度着ければ、今後着けずには居られなくなるという、恐ろしい代物らしい。
そういう評判を聴いていたから、前までこの公園を利用した時にはそれを用いるところまで踏み切れなかったのだけど、今回はそのオプションを希望していた。
装着を最後の最後にしてもらったのは、途中で気が変わっても逃れられないようにするためだ。まあ途中であっても逃げられないのはあまり変わりないのだけど。
自分で自分を追い込んでいっている実感を得て、また少し興奮が高まった。
私の背後に回った職員は、一言断りを入れつつ、私の股間のジッパーに手をかけた。
人に股間を弄られる、という普通は絶対しない行為に、反射的に羞恥心が沸き上がってくる。それと同時に、職員

がジッパーを引き下げていく。
ジッパーが開いていく際の微妙な震動が伝わってくる。神経を集中していたので、それは非常に強い刺激となって快感を誘発してきた。
「挿入可能か確認いたします」
そう言う職員の指先が、私の秘所に触れてくる。細い指先が優しく触れ、中へと入り込んできた。
特に刺激していたわけではなかったけど、ここまでの拘束で十分すぎるほど感じてしまっていた私の秘所は、はっきりと湿った水音を立て、抵抗なく職員の指を飲み込んでしまった。
恥ずかしくなって俯きたくなっても、真下を向こうとすると首輪が絶妙に邪魔になって俯かせてくれない。
全頭マスクによって覆われた顔に熱が集中し、マスクが特別熱く感じる。
職員の指はしばらく私の膣内を探っていたかと思うと、今度は肛門にも挿し入れてくる。私は元々お通じが良い方で、今日に関しては公園に来る前に予め中を洗浄しておいた。だからいまそこには何もないはずだ。
今回用いる器具は、そこも利用するので、必要な処置だった。
排泄する場所に異物が入り込んでくる感覚は、何度経験しても慣れるものじゃない。
目を瞑って嫌悪感と違和感をやり過ごす。
職員はすぐ指を抜いた。
「状態は良好のようですが……念のためローションを使用いたします」
職員に淡々と状態を伝えられ、私の羞恥心はさらに煽られる羽目になった。
程なくして、ひんやりとしたものに包まれた職員の指と思われるものが、秘所と肛門に挿し入れられた。微妙に感じるどろりとした感触は、彼女の指がローションに包まれていることを示している。
穴を解す目的で、固く閉じているのが当然な肛門の括約筋をなで回すように挿し入れられた指が動く。
身体の内側を撫で回される感覚は、おぞましくも背徳的で、嫌悪感以上に、禁忌を犯す快感が沸き上がる。
「ウウウーッ！」
思わず大きな声をあげてしまったけど、その声は口枷とマスクによって打ち消され、人間の言葉にはならない。
反射的に口枷を強く噛み締めたために、マスクの口が開き、けだものの呻き声が室内に大きく響いた。
そんな反応をされるのは慣れっこなのか、職員は淡々と作業を進めた。
「力を抜いてください」
犬を模した尻尾が繋がっているU字型の器具。その二つの先端を、ローションを用いて十分に解した私の秘所と肛門に、それぞれ差し込んでいく。

一般的な家庭の壁にある、電源のコンセントの差し込み口に、電化製品のプラグを挿す感じだ。

二つの穴は構造的に繋がっているので、本来両方を同時に広げるというのは、かなり無茶のある行為だ。

けれど、ローションの効果もあり、若干の抵抗はあったものの、身体の内側にそれが入り込んでくる。肛門に挿し込まれた側の突起の先端は膨らむようにできていて、私は身体の内側からも拘束されているような感覚に陥る。

私がどれほど力を込めて息んでも、もう抜けるような状態になかった。

正確にいえば、少しは出ようとするのだ。けれど、ある程度抜けそうになったところで、挿し込まれた奥の部分が膨らんでいるために抜けきることはない。

そして息むことに疲れて括約筋を締めると、今度は絶妙に調整された太さを括約筋が締め上げ、器具が体内に潜り込んでくる。

その動きは当然、肛門の器具と繋がっている秘所に挿し込まれた側の突起にも影響を与える。

簡単に言えば、肛門の力の入れ方次第で、一人でも楽しめるようになっているのだ。

それは限りなく不自由な身体になったヒトイヌの私が得た、数少ない楽しみであり、自由でもある。

いまの私は肛門を動かすことでしか楽しめない、哀れなヒトイヌであるわけだ。

股間に埋め込まれた器具は、職員が股間部分のジッパーを引き上げると、尻尾だけが外に飛び出した状態になって、外からは中がどうなっているのかわからなくなった。

この飛び出している尻尾の部分は私の肛門の力の入れ方次第で左右に揺れるようになっている。感情を表したい時は、お尻をみっともなく左右に大きく振るか、あるいは括約筋を締めたり緩めたりする必要がある。

いずれにせよ、身体の内側の器具は反応して動くため、嫌でも快楽を与えられることになるわけだ。

本当に惨めで、無様な状態だと、頭ではそう思う。普通の女性がこんな状態にされようものなら、即座に自死を考える程度には、人間としての尊厳を踏みにじられた状態だと思う。

確かにそう思うのに——私の身体は、どうしようもなく興奮して、昂ぶってしまうのだった。

あそこが封じられていて良かったと思う。もしもジッパーによって閉じられていなかったら、私はそこから恥ずかしい液を床に垂らしてしまっていただろうから。

四つん這いの体勢のまま、顔を俯けて自分の置かれた状況に暫し酔う。

その私の首筋に、職員が手をやった。

カチン、と妙に軽い金属の鳴る音がして、首輪にリードが装着される。その先は職員が握っていた。自分の首から伸びるリードの存在に、くらくらするほどの衝撃と感動が

あった。
「準備が完了いたしました。参りましょう」
立ち上がった職員が軽くリードを引くと、当然それが繋がっている私の首輪も引かれる。首が絞まる、というよりは引っぱられるような感覚がして、私は自然とその方向に向かって動き出していた。
四つん這いで、それも肘と膝を使って移動するというのは、慣れないうちは中々難しい行為だ。私はここに来るのが初めてではなかったけど、まだこの動きに慣れているとは言いがたかった。
ゆっくりと、一歩ずつ踏みしめるように歩を進める。かなり遅い歩みだったけど、前に立って誘導する職員が急かしてくることはない。
彼女は私のご主人様ではなく、ヒトイヌ公園の職員なのだから当然だ。本当はある程度厳しさを持って急かしたり、誘導したりしてくれる方が、ヒトイヌとしての動きは身につくような気がするけど、彼女にその役目を求めるのは無理な話だ。
（そういえば……希望すればその場限りのご主人様を募集することもできるんだっけ）
その場合、主従関係はあくまでその時の一度限り。もちろん素性を探るのはＮＧで、パートナーを探した場合は別の催しがあるらしい。
ご主人様にも色々なタイプがあるらしく、特定の子を飼おうとしない人もいるとかで、そういう制度が成り立っている。
（今回はまだ怖かったけど……次来る時は、ちょっと考えてみようかな……）
だんだん、この公園の深いところにはまり込んで行っているような気はした。
抜け出る気もないのだけど。
身支度を調えていた部屋を出て、建物内の廊下を歩く。建物内の床と、私の『足裏』がぶつかって乾いた音を立てる。
それは静かな廊下にことのほか大きく響いているような気がした。
（うぅ……はぁ……くぅ……っ）
一歩一歩踏み進める度に、全身を覆う様々な物が私の身体を締め上げてくるような気がした。身体から生じるラバーの軋む音が心をも震わせる。
目の前が揺らぐほどの感覚に身を浸しつつ、私が廊下を歩いていると、たまたまそこを通りがかった別の利用者とすれ違った。
私は四つん這いだったし、視界も制限されていたから顔まではっきりとは見えなかったけど、男女のカップルのようだった。
すれ違う際、明らかに向こうは足を止めていて、好奇の視線でこちらを見つめていた。視線が身体に突き刺さって

くるようで、全身が熱くなる。
　恥ずかしい気持ちを堪えつつ、先をいく職員についていくことだけに集中して、なんとかその二人の視線をやり過ごす。
「うわぁ……すごい……」
　すれ違う際、女の人の声がそう呟くのが聞こえてきた。思わず漏れてしまったというような、熱の籠もった呟きだった。
　私はその呟きに、羨望も籠もっていたのを感じる。だから、きっと彼女もまた、同じ望みを持った者だと悟ることが出来た。
　ヒトイヌとなっている私が彼女に言えることは何もない。だけど、せめて何か伝えられないかと、少し無理して首を捻って彼女の顔を見上げた。
　食い入るような視線と、私の視線が交錯する。顔の造形なんてわからなかった。ただ、その綺麗な瞳はとても印象的だった。
　自分も「そう」されたいという純粋な憧れ。自分も「こう」なるのだというわずかな恐れ。そして自分の内から沸き上がった情欲。
　様々な想いがその瞳に宿っていた。
　彼女との交錯はほんの一瞬だった。私は職員に従って、彼女は彼氏さんに促されてその場を離れる。
　私が彼女を少し羨ましいと思ってしまったのは、すでに特定のパートナーと連れだっていたからだ。
　その身体の自由ではなく、ご主人様の有無を羨んでしまう辺り、私の心はすっかり一匹のヒトイヌに成ってしまっている気がした。
（……あの人たちもこれから公園に入るのかな）
　公園内でもし出会うことがあれば、少し怖いけど触れあってみてもいいかもしれない。
　素性を探るのは公園のルール違反とされているが、お互いが同意した上での接触は禁止されていない。
　各ヒトイヌにはそれぞれ禁止されている行為がある。それは各ヒトイヌが会員登録をするときに設定しているものだ。
　例えば私だと「男女の性交渉」や「暴力全般」、「スカトロ関連」などを禁止事項にしている。
　ちなみに、これは利用者の中では比較的緩い方らしい。ヒトイヌによっては「他者の接触の一切」を拒否していたりするし、そうでなくても「特定の相手以外からの干渉」を禁止しているヒトイヌは結構いるそうだ。
　公園内での行動はプライベートな空間を除いて全て運営側に筒抜けであり、他のヒトイヌと接触する際には、運営から相手が設定している禁止事項について説明が入るようになっているので安心だ。
　もしそれを無視しようとすれば、すぐに警備員が飛んできて加害者は相当に重いペナルティを課せられるとか。

私はヒトイヌ入場しかする気がないので、その辺りの細かい内容は良く知らない。ただ、ヒトイヌ入場する者には私が想像しているよりも遥かに多く、確実な安全措置が取られているという話は聴いていた。

だからこそ、身体の自由をほとんど奪われる危険なヒトイヌプレイに没頭することができるのだ。

それはさておき、その後は特に他の利用者とすれ違うことはなく、ついにその場所へとたどり着いた。

公園内に続く扉だ。

ただし、私が導かれたその扉はいわゆる犬用の出入り口だった。高さにして数十センチしかなく、一般入場する場合は別の扉がある。パートナーがいないヒトイヌはここから入るのだ。

職員が私の脇にしゃがみ込み、私の首輪からリードを取り外してくれる。

「終了時間となりましたら職員の者が回収に参ります。それでは、当公園を心ゆくまでお楽しみくださいませ」

綺麗に頭を下げてくれる職員に、心の中で御礼を言いつつ、逸る気持ちを抑えながら、慎重に扉に近付く。

扉はペット用の入口と同じく、頭で押すと開くつり下げ式になっている。ある程度押すと自動的に扉が開いたまま固定され、難なくくぐり抜けることができた。

そうして私は、ヒトイヌ公園に入った。

良く晴れた秋の空が頭上に広がっている。

秋の空というのは元から高く感じるものだけど、普段よりも遥かに高く感じるのは気のせいではない。

物理的に視線が下がっているのだから。

ヒトイヌ公園はかなり広かった。

いまの私には途方もないほど広く感じられる。出てきた扉からまっすぐ、遊歩道が伸びていた。

遊歩道の左右には花壇や休憩所などもあるが、基本的には青々とした芝生ゾーンがいくつも広がり、ちょっと道を逸れただけで遊びたい放題だ。公園の性質上、子供は入園できないが、子供が遊べないのが少し残念に感じるほど、広くて整備の行き届いた、見事な公園だった。

私はまず、動きに馴れる意味も含めて、その遊歩道を歩いていくことにした。景色を楽しみつつ、四つん這いで一歩一歩進んでいく。

（風が気持ちいい……）

こんな風にヒトイヌ拘束を施された上で、野外の道を歩くなんて、この公園以外では経験できないだろう。もし歩けたとしても、いつ誰に見つかって警察を呼ばれやしないかとビクビクしながら歩かなければならなかったはずだ。

そういう「見つかるスリル」や「見せ付ける快感」を楽しめる人ならともかく、私のように純粋にヒトイヌプレイを楽しみたい人にとっては余計な神経を使う。

でも、この公園ではその心配はない。誰かに行き会ったとしても、それはこの行為に理解のある人であり、安全は保証されている。場合によっては、一緒に楽しんでもらうことだって出来るかもしれない。その楽しみ方に人それぞれ幅はあるけど。

ヒトイヌ公園ならではの開放感と安心感に満たされたまま、私は遊歩道を歩いて行く。秋に入って涼しい気候になってきたものの、いまの格好が格好だ。

少し歩くだけで瞬く間に全身が熱くなり、ラバースーツ内が汗で蒸れに蒸れているのがわかる。

（程よく水分補給はしないとね……夢中になりすぎないようにしなきゃ）

全頭マスクと口枷を着けたままでも、水分補給する方法があるのだ。本当にこの公園の技術力はすごいと思う。

体調に気をつけつつ、転ばないようにしながら歩いていると、不意に私の前に影が差した。俯いていたせいで、近くに人が来るのに気づくのが遅れたのだ。

慌てて仰ぎ見て見ると、そこには通常入場してきたと思われる年配の男性の利用者がいた。ニコニコとした気のいいお爺さんだ。明らかに並の人じゃない、オーラが違う。来ている服も堅苦しくない程度に着崩されたスーツで、異様に似合っている。

ヒトイヌの姿を見知らぬ人に見られているという状況に、一気に心臓の鼓動が早くなるのを感じる。

そのお爺さんは笑顔のまま、口を開いた。

「まだ『コイヌ』のようじゃな」

呟かれた内容に、私はどきりとする。見る人が見ればすぐわかるのかもしれないけど、まだまだヒトイヌ経験が浅いということをあっさり見抜かれたからだ。

「ふむ……少しだけ躾けてあげようかの。ここまで歩いてご覧なさい」

明確な命令、というわけではなかったのに、そこに込められた威厳に思わず従っていた。

少し前に立つお爺さんに向かって一歩、二歩、進む。

「ああ、それではいけない。視線は前に。顔をあげなさい。かえって不安定になる」

言われて私は顔をあげる。そういえば足下に慎重になるあまり、ずっと真下を見ていたのだった。

意識して顔を持ち上げ、まっすぐ前を見ながら手足を動かす。そんな私のまだまだ拙いだろう動きに、お爺さんはニッコリと笑ってくれた。それがとても嬉しかった。

「自然と背をよく反って、よい子じゃな。……手足はリズムよく動かしなさい。最初は転ばないようにゆっくりでいい。自分のテンポを掴むことが出来れば、行動範囲がぐっと広がるぞ」

言われた通りにしただけで、動きやすさが全然違った。体力は使いそうだけど、恐る恐る歩くのとは段違いに楽しい。

そうしたら、お爺さんの傍まで、すぐにたどり着いてしまった。
いかにも高級そうなスーツが汚れるだろうに、お爺さんはわざわざ膝を折って、いまの私の視線の高さに合わせてくれた。
「飲み込みも早いし、おぬしはすぐに良いヒトイヌになれるじゃろう」
そう言って、お爺さんが私の頭を撫でてくれる。全頭マスクの上からだけど、その掌の温かさが伝わってくるようだった。
思わず擦り寄りたくなったけど、お爺さんの気品の高さに臆してしまう。
せめて、と感謝の気持ちを込めて、撫でてくれている掌に頭を自分からすりつける。
ちゃんとその意思が伝わったのか、お爺さんは柔らかく微笑んでくれた。
「ではの。がんばるんじゃぞ」
お爺さんは立ち上がり、汚れた膝を払いもせず、歩き出してしまう。私とすれ違ったということはもう帰るところのはずなので、追いかけるわけにはいかなかった。
少し寂しい気持ちでお爺さんの姿を目で追っていると、十分離れたところで膝の汚れを払っていた。
どうしてわざわざ離れてから、と思いかけ、それが私に砂埃をかけないようにするための配慮だということに遅れて気づく。
いまの私の顔の高さだと、ちょうど膝が目の前になってしまう。だから、立ち上がってすぐに払うことはせず、離れてから払ったのだ。
ヒトイヌに対する気配り、というものなのだろう。お爺さんはそれを実に自然にやっていたわけだ。
（うわぁ……なんか、いいなぁ……）
私に被虐趣味はないし、虐待されるペットみたいに、やたらと虐げられるのはごめんだ。
だから、もしご主人様を得るとしたら、ああいう自然と気を配ってくれる人がいい。
お爺さんと別れて再び歩き出しながら、そんなことを考えるのだった。
そうやって歩くことしばらく。お爺さんに躾けてもらった通りに歩くと、軽快に動けてとても楽しい。ウキウキした気分で歩けていた。
しかし、気持ちが楽になったとはいえ、四つん這いでの移動はそれだけで体力を消耗する。少し疲れを感じてきた私は、一度止まって呼吸を整えた。
呼吸制御が目的ではないとはいえ、口枷を咥えている上に全頭マスクを被っているため、自然と呼吸はかなり制限されたものにならざるをえない。
鼻でしか呼吸できないのも辛いところだ。全頭マスクにはちゃんと呼吸用の穴が空いているけど、制限されている

から浅く短い呼吸を繰り返すしかない。
その小さな穴を用いて、フスフスと鼻呼吸を繰り返す音は、少し犬のそれに似ている。
自分がヒトイヌになっているのだという自覚を促す要素のひとつでもあった。
私は休憩がてら、自分がいままで歩いてきた道を振り返る。出てきた建物が少し遠くに見えていた。
それなりに歩いたつもりでいたけど、四つん這いの歩みは想像より遥かに遅い。
（うーん、まだまだ時間はあるけど……）
このままでは、移動時間だけで入場時間をかなり削ってしまいそうだった。
ヒトイヌ入場の時間は一般入場より遥かに長く設定されているけど、移動時間でそれを消費してしまうのはもったいない。
ご主人様がいれば移動時間も楽しめるのかもしれないけど、私にはいないしね。以前に来た時は、遊歩道にも人がいて、視られる楽しさがあったけど、どうも今日は利用者が少ないというのも大きい。
（お爺さんに出逢えたし、歩いたのは無駄じゃなかったけど……もういいかな）
そう考えて、公園内に張り巡らされているヒトイヌ用の移動手段を使うことにした。
公園内にはヒトイヌしか通れない入口や利用できない施設がいくつかある。
そのうちのひとつを利用してみることにした。
周囲を見渡すと、道のすぐ脇に小さな入口が用意されていた。例えるなら穴熊とかの巣のようで、スロープ状に下って地下に潜れるようになっている。
その中に慎重に入っていくと、奥にエレベーターの入口のような扉があった。扉は良くあるエレベーターのそれと同じように、透明な硝子の窓がついていて、扉の向こう側が見えるようになっている。
扉の横にはそれこそエレベーターのようにボタンがいくつも並んでいる。ただし、普通のエレベーターのように縦ではなく、横に並べられている。これはまあヒトイヌが利用するのだから当然だろう。
それらのボタンは、番号ではなく直接行き先の名前が書かれている。その中の「休憩所」と書かれたボタンを、私は鼻先で押した。するとそのボタンが点灯し、機械的な音声が「休憩所行き、参ります」と告げる。
待つこと数十秒。目の前のエレベーターのような扉の向こうに箱が到着する。扉が開くと、トロッコのような、車輪のついた箱が口を空けて出迎えてくれた。
トロッコは三両編成になっていて、一番前のトロッコにはすでに誰かが乗っているようだ。窓があるわけじゃないからはっきりと姿は見えないけど、わずかな隙間から動いている何かが見える。

私はすぐ傍に自分と同じようなヒトイヌがいるということにドキドキしながら、そのヒトイヌを待たせないように、トロッコに急いで乗り込む。

トロッコはそんなに大きなものじゃない。ヒトイヌが一頭入るともう一杯だ。無理すれば二頭入れるかもしれないけど、かなり狭苦しい体勢にならないと無理だろう。

尻尾を閉まる扉に挟まないように注意しつつ、身体をトロッコの中に押し込む。開いていた扉が自動的に閉まり、私を四角い箱の中に閉じ込めた。

箱の中に明かりは灯っているけど、さほど明るいものじゃなく、荷物として運搬されているような被虐的な感覚を煽ってくれる。

雰囲気に浸っていると、ゆっくりとトロッコが動き始めた。ほとんど震動らしい震動は感じられない。ヒトイヌ拘束をされた状態で、乗り物酔いなどしてしまったら大変だ。それを防ぐためか、かなり気を遣って作られているのがよくわかった。

これが、ヒトイヌが素早く施設間を移動できる仕組みだった。ヒトイヌ状態ではどうしても移動速度に限界があるから。遠い施設にはこれに乗って移動する方がいい。

ヒトイヌ拘束を施してもらった建物からこれに乗って移動する事も出来る。私はまだまだヒトイヌ公園の全体像を掴み切れていないけど、それはそれだけこの公園が広大だということでもある。

一体どれほどの資金を注ぎ込めばこんな公園が出来るのやら。その全てを味わい尽くすには、何度も通わなければならない。

（あ、でも確か長期間滞在できるプラン、みたいなのもあるんだっけ……？）

何度もヒトイヌ公園を利用したヘビーユーザー向けという話だけど、そういう長期間滞在するプランもあるというのは聴いていた。

どういう人が利用するのかはわからないけど。私みたいな大学生が夏休みとかに来たりするのだろうか。

それはさておき、休憩所に着くまでは少し時間がありそうだ。

（……うーん、と。せっかくだし、ね）

少し迷ったけど、休憩所に着くまでの間、こっそり楽しむことにした。

この狭い空間でも出来る、肛門と秘所に挿入された器具を用いての、ひとり遊びだ。

トロッコの内部は狭く、事実上身体の自由はほぼ奪われている。そうなると、出来ることは限られていて、そういった時のために挿入してもらったのだ。

まず、肛門に思いっきり力を入れ、器具を締め付けてみる。力を入れると、挿し込まれた器具は内側に向かって、奥の壁を突くように入り込んでくる。それは肛門だけのことじゃなく、U字型に繋がっている秘所の方もだった。

わずかな動きとはいえ、ヒトイヌ拘束を堪能し、敏感になっている私には十分な刺激となった。
「ウゥゥ……ッ！」
思わず、声が漏れる。
前の車両には他のヒトイヌが乗っているはずで、もしかしたら聞こえてしまったかもしれない。
「ウ……ッ」
その私の考えは、目の前の壁越しに同じような呻き声が聞こえてきたことで、正しいことが証明された。きっと、前の車両に乗っているヒトイヌも、私と同じように移動時間を利用してひとり遊びをしているのだろう。
（仲間がいるって、いいなぁ……）
顔どころか姿すら見ていない相手に親近感を抱きつつ、私はひとり遊びに集中する。
今度は排泄をする時のように息んでみた。肛門に挿し込まれている器具が外へと押し出されそうになって、すぐに強烈な抵抗にあって止まる。
抵抗の正体はラバースーツの弾力だった。器具を挿し込まれる際には全開になっていた股間部分のジッパーは、いまは外に飛び出す尻尾の幅を除いて締められている。
そのため、挿し込まれた器具を押さえ込んでいる状態になっている。私がどれほど本気で、器具を外に出すつもりで息んだとしても、丈夫なラバースーツはそれを許してくれない。むしろ再び器具を奥に押し込もうとする。
息むのに疲れてその力を緩めると、ラバースーツが待っていましたとばかりに、器具を私の体内に向けて押し込んでくる。
「フグゥ……！」
そうすると思わず括約筋で締め付けてしまい、「締め付けると奥へと入り込んでくる」器具の機能も相成って、勢いよく奥を突かれているような感覚となった。
ストロークの動きとしては極小さなものだったけれど、ラバースーツに閉じ込められ、知覚が制限されることで研ぎ澄まされたいまの私には十分な刺激だった。
身体は一切動かさないまま、ただお尻に力を入れては抜いてを繰り返すだけで、激しい自慰行為をしているかのような、強い快感を覚えてしまう。
（ああ……逝っちゃいそう……けど、逝けない……っ）
これが残酷なことに、ものすごく気持ちいいことは確かなのに、物理的に与えられる刺激が全然足りなかった。
絶頂を迎えるにはあまりに弱々しすぎるのだ。緩く、燻るような快感の火種がいつまでも燃え上がらず、身体の中心に居座り続ける。
だから、必死になってお尻に力を入れ、少しでも強い刺激を得ようと躍起になってしまう。
それはとても無様なことで、脇から見ていたら浅ましい以外の何者でもないだろう。
心まで獣に落とされてしまうような、そんな危機感を抱

く。それでも肛門に力を入れるのは止められない。心がすでに完全に囚われていた。

じわじわと身体の熱が増していくのに、全くイケないという地獄の状態が続く。

「フゥー、フゥー」

荒い呼吸音が狭い空間に響く。自分の置かれた状況を理解したくはなかったけど、理解してしまう。興奮度合いはどこまでも高まっていくのに、やっぱり絶頂に達するまではいかないのだ。

（くせになりそう……いえ、もうなってるのかも……）

悶々とした心と身体を抱えながら、さらにしばらく時間が経過する。

時計がないから正確な時間はわからないけど、そう長い時間じゃないはずだった。

私には何十分もそうしていたような気がするけど、実際は長くて数分程度だろう。

トロッコの中にアナウンスが響く。

『休憩所に到着しました。速やかに降車してください』

それと同時に、トロッコの扉がゆっくりと開いていく。

開いた扉はそのままトロッコから降りるためのタラップになった。

疼いて仕方ない身体を抑えつつ、トロッコから慎重に降りる。

降りた先は駅のホームみたいになっていて、行き先ごとに路線と乗り場があった。休憩所というヒトイヌが集まりやすい場所だからか、特別広く作られているんだと思う。規模は全く違うけど、東京駅とか大阪駅みたいなものかな。

たくさんのヒトイヌがここに集まっていた。たくさん、と逝ってももちろん実際の駅のように何百人といるわけじゃないけど、見えている限りでも五頭もいるのは、十分多いと言っていいと思う。

それぞれに施されているヒトイヌ拘束は、個々のヒトイヌによってかなりばらつきがあった。確実に共通しているのは犬耳と首輪と尻尾くらいのもので、拘束の厳重度や露出度はかなり差がある。

私と同じようにほぼ全身が覆われていて、犬のフォルムに近いヒトイヌも居れば、ラバースーツを身につけておらず、地肌の大半が露出しているヒトイヌもいる。「人間の四肢を折り畳んで拘束している」というのが露骨で、隠すべき乳首や性器が露出していた。

身バレ防止のためか、全頭マスクだけはしっかり被っているけど、恥ずかしそうにしきりに身を捩っている。こう言ってはなんだけど、顔だけは厳重に覆われているから余計に変態チックだな、とは思った。

恥ずかしがり方の度合いからして、私みたいに自分からああいう格好をしているとは思いにくいので、ご主人様に命じられてのことかもしれない。

ちょっと気になったけど、トロッコに乗り込んで行ってしまった。帰るところだったんだろう。少し残念だ。

他には、男性らしきヒトイヌもいた。らしき、というのはほぼ全身を覆われていて、身体のフォルムから推測ができなかったからだ。女性から見ても羨ましいほどに細身だし。ならばなぜ男性だと感じたのかといえば、股間にそそり立つ棒状の物があったからだ。

もちろんそこもラバーに覆われていて、本物かどうかはわからないのだけど。生々しく動いている感じは本物のように見える。

ただ、その男性器のように見えるそれの途中には、金属製の枷のようなものが嵌められていた。もしあれが本物だとしたら、それが締め付けているので、自由に射精することは出来そうにない。

そんな感じに、拘束度合いも性別も様々なヒトイヌが、それぞれ動き回っている。改めてこの公園の特異性に感心した。

「……ウゥ」

そうしていたら、不意に真横から小さな唸り声がした。驚いてそちらを見てみると、いつの間にか隣のレーンに入ってきたらしいトロッコの中から、一頭のヒトイヌが私を見ていた。

それは女性のヒトイヌだった。身体に装着している拘束具は私の物と良く似ているけど、頭部は全頭マスクではなく、顔の下半分だけを覆うタイプのマスクだった。ショートカットの髪型や目が露わになっていて、私も同じヘッドホンや犬耳を着けているはずなのに、私よりずっと可愛らしい雰囲気が伝わってくる。見た感じ、かなり若い感じがするから、そのせいだろうか。

若いと言ってもこの公園は当然ながら未成年立ち入り禁止だから、最低でも二十歳の私と同い年のはずだ。

（……いや、確か親の承諾があれば十八歳から入れるんだっけ？）

でもまあ、こんなところへの入園に関して親の承諾を得られるなんて有り得ないだろうし、二十歳と考えるのが妥当だろう。

ちなみに制限ギリギリの二十歳の私がすでに何度もこの公園を訪れているのは、それだけこの公園にハマってしまっているということだった。

実のところ、これだけ至近距離で別のヒトイヌと相対するのは初めてだ。一般入場の人には見られたり触られたりしたけど、同じヒトイヌとは運悪く出くわさなかった。

一口にヒトイヌ拘束と言っても、色々違いがあるんだなと興味を惹かれて、そのヒトイヌを見つめていると。

「ウゥ……」

そのヒトイヌは眉を八の字にしながら再び唸った。

そこに怒りの感情は込められていなかったけど、困っているような気配がある。

（何が言いたいのかな？　……あっ！）
暢気に首を傾げかけ、ようやく自分のいまいる場所が彼女の降りようとしている場所だということに気づいた。
私がそこにぼーっと立っているせいで、彼女はトロッコから降りられないのだ。
（わわわっ、ごめんなさ……いっ！）
慌ててしまったのが、良くなかった。
不自由な拘束をされているのだということを忘れていた。無理に移動しようとしたせいで横向きに転んでしまったのだ。そのまま勢いでころんと仰向けになってしまう。
両手両足は折り畳まれている状態であるため、必然的に大股開きの恥ずかしい体勢になってしまう。幸い、転んだ衝撃は大したことがなかったのだけど、ものすごく恥ずかしい。慌てて起き上がろうとして手足をばたつかせる。冷静に身体を捻ればすぐ起きられたのに、無闇に動かすものだから余計に混乱した。
転がったことで、相手を驚かせてしまったようで。
「ウウゥッ！　ウゥ、ウゥウウウ……ッ」
相手も慌てて声をあげていた。普段なら手を差し伸べるところだけど、彼女もその手が封じられている。おろおろと私を心配する視線を向けることしかできない。
（お、起き上がらなきゃ……！）
彼女に心配をかけたままではいけないと思い、身体を捩って手足を突っ張り、なんとかうつ伏せに反転することに成功した。その体勢になればあとは肘と膝で身体を支える四つん這いの姿勢にすぐ戻れる。
「「フゥ……」」
思わず安堵の息を吐く。それに一部始終を見ていたヒトイヌの声が被さった。
心配してくれたことは間違いなかったので、身体を動かして「大丈夫」だということをアピールする。
その際、私は本物の犬のように、尻尾を振って見せた。さすがにすぐに括約筋を締めたり緩めたりするのは難しかったので、お尻を振る形になったけど。
尻尾を振るのと同時に、秘所に挿し込まれている部分が強く震える。
（うぁッ！　そ、そうだ、尻尾の動きに合わせて動くんだったわね……）
思わず硬直してしまったけど、軽く振っただけで十分意思は伝わったようだ。
彼女もそれに応えるように軽くお尻を振って尻尾を揺らしてくれる。傍から見るとお尻を振って誘っているようにも感じられて、少し煽情的かもしれない。
（って、それは私も同じよね……むしろ私に合わせてくれたのかも……）
そんな気はないだろうけど、恥ずかしい動きをしていたのだと教えられた気がした。
彼女は私よりも尻尾の器具の扱いに慣れているらしく、

最初の数回はお尻を振って揺らしていたけど、途中からはほとんどお尻を動かしていないのに、尻尾だけが左右に揺れていた。尻尾が動いているということは、挿し込まれている部分の器具が動いているということだ。どんな感覚なんだろう。

（ンッ……こう、かな？）

お尻を動かさないようにして、尻尾だけを動かす。括約筋で器具を強く締め付けると、尻尾が自動的に左右に揺れ始め、それと連動して器具の膣内の部分が震える。電気が流されているようだ。

（で、できた……っ）

沸き上がる快感を堪えつつ、私は尻尾だけを振る。彼女の目元は良くわかるため、にっこりと笑ってくれたのがはっきり見えた。

私は嬉しくなって、彼女にゆっくり顔を近付けていく。彼女に近付こうとしても運営は何の警告もしてこなかったので、彼女も私と同じで接触などを拒否していないのだとわかった。

彼女は一瞬構えかけたけど、こっちの意図を察したのか、同じように顔を近付けて来てくれた。

「ウウ、ッ」

「ク、ゥン」

私たちはお互いにお互いの首筋に顔を埋める。犬がじゃれ付き合うような、そんな感じをイメージして。鼻はマスクに覆われているから、匂いはハッキリわからない。

けど、空気穴を通じて、かすかに女性らしい髪の匂いを感じた。

ラバーの強烈な匂いに麻痺しかけていた嗅覚が、その毛色の違う匂いによって蘇る。

一方の彼女はどうだろう。私の身体は彼女と違って頭までラバーに覆われているから、彼女にはラバーの匂いしかしていない気がする。代わり映えのしないラバーの匂いしか与えられないのは、少し申し訳ない気もした。

とはいえ、お互いにとって重要なのは匂いそのものではない。『互いの身体の匂いを嗅ぎ合う』犬のような仕草を見ず知らずの相手とする、という行為こそ重要だ。

この公園に来なければ、同じヒトイヌプレイ愛好者と、それも見ず知らずの相手とこうして出会うことなんて有り得なかった。

それが実現している事実に私は、そしてきっと彼女も興奮しているのだから。

「クゥ、ン……」

私は彼女が嫌がっていないのを確認してから、首筋だけじゃなく、肩や背中に鼻先を擦りつけていく。さすがに身体はラバーの匂いしかしなかったけど、しきりに鼻を鳴らし、必要以上に音を立てて彼女を煽る。

彼女は反射的になのか、身体を退くこともあったけど、すぐに彼女の方からも私の肩や腕に鼻先をすりつけてき

た。
「ウゥ、ン、クゥ……っ」
私たちは犬がそうするように、お互いの身体を擦り合わせる。ラバー同士が擦れ合い、奇妙な音を立てる。
身体を激しく動かすものだから、呼吸も荒くなり、鼻を鳴らす音も大きくなる。
まさに発情した犬のようだ、と一度思ってしまうと興奮はどこまでも昂ぶっていく。
（――ッ！　ダメ！）
快楽に溺れてしまいそうになった身体を、無理矢理絞り出した理性で押さえ込み、彼女から離れる。
彼女の方はすっかり興奮していたらしく、急に離れた私に哀しそうな視線を送ってくる。哀しませてしまったことを申し訳なく思いつつ、首を振ってその動きで彼女を促した。
私はいまいる場所を思い出したのだ。
移動用のトロッコの乗り降り口で、いつ他のヒトイヌが来るのかわからないし、トロッコが行き来する場所でそういうことをするのは危なすぎる。
このままここにいたら、他の利用者の邪魔になってしまいかねない。
そのことに彼女も気づいたのか、恥じ入るように身を竦めた。ちゃんと周りを見ることのできる子のようだ。
（やっぱり、なんとなく年下みたいな感じなのよね……）
私は歩き出しつつ、彼女に視線を向けて付いてくるように示唆する。ここで降りようとしていたということは、彼女も休憩所を目当てにやって来たということ。
一緒に「遊ぶ」ことは出来るはずだ。
彼女は少しだけ躊躇った後、私のあとについて動き出し始めた。その動きは淀みなく、私なんかよりよっぽど慣れているような感じがする。
（うーん、不思議な子ね……どういう経歴なのかしら……って、いやいや。そういう素性の詮索はＮＧだってば）
自分がされたら困ることをしてはいけない。思わず思考を巡らせてしまった私は、自戒してその考えを頭から追いやった。
後ろからトコトコと付いてくる彼女。後ろから付いてこられるということは、私の恥ずかしいところが全て丸見えになっているということである。ラバースーツによって隠されているとはいえ、尻尾が飛び出ているのが見えているはずだし、その中がどうなっているのか、同じ装備を身に付けている彼女ならば容易に想像が付くだろう。
彼女の視線が私のお尻に向けられているのをはっきりと感じ取りつつ、恥ずかしさを堪えて四つん這いの歩を進めた。
トロッコの乗降場から、緩やかにカーブしたスロープを登って少しすると、クッションや自動販売機など、ヒトイヌが休むための設備が用意された休憩所にたどり着く。

休憩所の入口には「ヒトイヌ休憩所」と看板が立てられている。看板には「人間の入場は禁止」と書かれている。

物理的に人間の入場は出来ないのだから、注意書きにあまり意味はない。でも、そこに入場できる私たちは「人間」じゃないと言われているようで、思わず感じてしまった。人扱いされないことに興奮するというのも変な話だけど、どうしても興奮してしまうのだから仕方ない。

入口に設置されているマットで軽く手足の汚れを拭き落とす。さっき転んでしまったので完全に落としきれるわけじゃないけど、これもマナーの内だ。躾けられていないヒトイヌと思われるのは嫌だった。十分汚れを落としてから、休憩所の扉を潜る。

休憩所はちょっとした倉庫くらいの広さがある。天井は高く、普通なら二階にあたるくらいの高さから上の壁が、全て曇り硝子になっていた。

実はその硝子は全てマジックミラーである。動物園で動物を見物する場所のように、その向こう側が観覧席になっているということを、ヒトイヌ側も知っていた。

もしかするといまこの瞬間も上から見られているかもしれない。いつもは何頭か他にもヒトイヌがいるのだけど、今は時間が悪いのか私たち以外のヒトイヌはいなかった。

だから、見物客がいるとすれば私たちに視線が集中しているはずだ。

ここにくるとまさに動物園の動物になった気分になる。見られているとしても、この公園内にいるのは同じ趣味嗜好の持ち主ばかりだから、怖くはない。

ヒトイヌによってはそうやって観察する人の中からご主人様を募集することもあるそうだ。私はまだそこまでは踏み切れていないけど、人に見られることにはだいぶ慣れてきた、と思う。

見られることは同意の上なのだから、恥ずかしがって情けない姿を見せるわけにはいかない。

私にも謎の矜持があった。なるべく外を歩いている時と変わらないように、堂々と歩く。

休憩所にはクッションが敷き詰められた、身体を休めるためのスペースがある。

私はそこに行くところりと寝転んだ。背中を軟らかい床に着け、無防備にお腹を晒す格好だ。

自然と両手両足が左右に開き、身体の前面を堂々と晒す。人間の女性として取るとすれば死にたくなるくらい恥ずかしい姿勢だけど、これがヒトイヌ同士で遊ぶ基本姿勢なのだから仕方なかった。頬に熱が集まっていることは悟られていないはずだ。

「ウー……」

そんな体勢の私に、付いてきてくれたヒトイヌの彼女は若干躊躇いつつも、ゆっくりとのし掛かって来る。

私の胸と彼女の胸が合わさり、顔と顔の距離が縮まる。

そして、腰と腰を擦り合わせるように、彼女は体重を預

けてきた。
「フゥウ……！」
「クウゥ……！」
言葉を剥奪されたヒトイヌ同士、私たちは小さく唸る。互いの身体で感じるなんとも言えない甘美な刺激を味わっていた。
ラバースーツに包まれた身体同士が擦れ合う、独特の感覚を存分に味わう。胸が互いの弾力を受けながら潰れ、その独特の柔らかさで擦れ合っている。
分厚いはずのラバースーツ越しにも、彼女の身体の熱を感じる。彼女が甘えるように頬ずりしてくるのに合わせ、私も鼻先を使って彼女の頬を撫で回す。
胸と胸が擦れ合うと、ラバースーツを隔てても乳首が反応しているのがわかった。ラバースーツによって押さえつけられているはずなのだけど、固くなってそこにあると存在を主張している。
彼女が胸を押しつけてくるのに従い、私たちの胸は軟らかく歪み、ラバースーツの感触も相成って火に炙られるような快感を生み出すのだった。
そして、女性にとって最大の快感が生まれる場所、秘所と秘所の擦り合いは、私が想像していなかった要素のために、遥かに強烈な快感を産み出していた。
私の方はお尻の尻尾とそれに連動した器具が挿し込まれているだけだけど、彼女の方はそうではなかったのだ。
彼女のそこには、内側だけじゃなく、外側も覆うような器具が装着されていた。カバーのようなものが彼女のクリトリスの辺りを覆っている。それはランダムな震動パターンで彼女を常に責め立てているようだ。
そのオプションは私が付けるがどうか悩み、結局つけなかったオプションだ。だってご主人様がいない私には、途中でそれが嫌になっても止めてくれる人がいない。それで体力を消耗しきってしまう可能性を恐れ、つけられなかった。次来るときには、くらいは考えていたけど。
（この子は、もうそのオプションを選択している……！）
私よりも若く思える彼女は、ヒトイヌとしては相当な猛者らしかった。
彼女の秘所と自分の秘所を合わせると、震動がダイレクトに伝わってくる。激しい快感を生み出していた。ここまでの道中で十分に昂ぶっていた私の身体は、機械の圧倒的な刺激に絶頂へと導かれてしまっていた。
（う、くっ……も、もう……っ、いっちゃ、う……！）
腰が跳ね、いよいよ絶頂を迎える、というところで、不意に彼女が身体を離した。
（ああ……っ、いいところだったのに……）
せっかくイケそうだったのに、と不満を抱いて彼女を見上げると、彼女の目が楽しげに笑っていた。私が絶頂しかけていたことを理解し、それを意図的に阻止したらしい。
同じヒトイヌにも関わらず、彼女は完全に支配者としての

笑みを浮かべていた。
（う……！　まさか、この子……っ）
大人しそうに見えたのは外見だけで、とんでもない牙を隠し持っていたらしい。そんな彼女の前で、弱みを見せてしまったのが運の尽きだった。
彼女は再びゆっくり体重を預けてくる。秘所と秘所とが合わさり、また震動がダイレクトに伝わってくる。
「ウゥッ、ウウゥ！」
私が絶頂に達しそうになると、彼女は腰を浮かして気持ちいい刺激を取り上げられてしまう。イケないまま、そうやって何度も何度も嬲られた。
こうなってしまっては、私の被虐的な性質も相成って、彼女が与えてくれる快感から逃れることができなかった。
「ウゥ……ッ、クウゥン……！」
思わず切なげな鳴き声を漏らしても彼女は絶頂を許してくれず、執拗に私を嬲ってくる。断続的に与えられる快感に呼吸が乱れ、元々小さな呼吸穴しかない私は、酸欠に近い状態に陥っていた。必死になって新鮮な空気を吸おうとしても、一定以上空気は循環してくれない。
（この、ままじゃ……おかしくなる……っ）
頭がぼんやりとして、だんだん冷静な思考が出来なくなっていた。
とにかくイキたい。そう思った私は、思い切って反撃に出た。
マウントを取っている彼女はすっかり征服者側で、意地悪くまだ私を焦らそうとしている。そんな彼女の体を、私は両手と両足で挟みこんだ。
思わぬ反撃に彼女は驚いて身体を硬直させる。この瞬間が狙い目だった。
（そぉ、れっ！）
全身に捻りを加え、彼女ごと横にゴロリと転がる。突然のことに対応できなかった彼女は、あっさり私に巻き込まれて転がることになり、気づけば今度は私が彼女を組み敷いている。
突然のことに対応できなかったのだろう。彼女はあっさり私にマウントを許すことになった。こうなったら、立場は逆転だ。彼女には見えていないことを承知の上でにやりと笑うと、腰を落として秘所と秘所を強く擦り合わせる。
機械による刺激には慣れていたとしても、外からこうして刺激を与えられるのには離れていないはずだ。
「あウッ、クゥ……！」
案の定、彼女はうろたえ、突如として主導権を奪われたことで混乱している。じたばたと短い手足を暴れさせるが、こちらも譲ってあげるつもりはない。加虐的な笑みも似合うと思ったけど、責められて震える様子はもっとお似合いだった。
（……まあ、それは私も変わらないかもだけどね）
被虐体質であろうと、相手を責めることはできる。



私は彼女のように焦らすということをしなかった。正確にはできなかった。

震動が与えてくれる快感に身を任せ、彼女の上ではしたなくも腰をすりつけて刺激を増やす。

「クウァ……ッ、フウゥ、ンクッ……」

その刺激は彼女にも強烈だったのか、彼女もまた絶頂寸前のように身体を震わせ始めた。いまにも絶頂に達しそうだ。

（あっ……ああっ、くぅ、ッ！）

「ウゥ、ウウウウッ！」

私と彼女は、同時に絶頂に達した。初めて一緒に気持ちよくなったのに、同時に達することが出来るとは思っていなかった。

（相性、いいの、かも……）

絶頂の余韻に浸りつつ、私は彼女の身体に自分の身体をすり寄せる。そうすると、じんわりとした温かさが伝わってきて、とても心地よかった。

しばらくそうやってじっとしていると、彼女が動きたそうにし始めたのを感じて、急いで彼女の上から退く。

（重かったかな……？）

そう反射的に思ってしまったのは、性分なので仕方ないだろう。

幸い、そういうわけではないようで、彼女の目に不満や不機嫌そうな気配は感じられなかった。

彼女はクッションだらけで起き上がりにくい状況にありながら、上手く勢いを付けてあっさり起き上がった。

やっぱりヒトイヌとしての経験値が私よりもかなり高いのは間違いないようだ。

起き上がった彼女は、私に軽く身体を擦りつけると、私を先導するようにしながら歩き始めた。どこに行くかと思えば、自動販売機があるスペースに向かっている。

（ああ、喉が乾いたのね。そういえば私もだいぶ喉が乾いたなぁ……）

その気がなくても思い出すと飲みたくなるものだ。彼女について自販機のコーナーに向かう。

ヒトイヌ拘束を施されている状態で、自動販売機でどうやってドリンクを飲むのかという話だけど、当然ながら普通の販売形式ではない。

自動販売機にはいくつかの種類の飲み物が並んでいて、見やすいように地面に近い位置にある以外は普通の自販機と変わらない。

違うのは、選んでからの流れだった。

トロッコに乗り込む時のように、鼻先で欲しいドリンクのボタンを二度押す。

すると、斜め上から管が伸びて来た。

口枷を噛み締め、マスクの口部分を開き、その中に管を受け入れる。口枷は噛み締めることで噛んでいる部分の中央に穴が開く仕組みがあって、そこに管を挿し込んでドリ

ンクを飲むことが出来るのだ。
まるで赤ん坊がほ乳瓶でミルクを与えられている時のような感じだ。いや、どちらかといえば、牛や山羊が飲み物を与えられている感じの方が近いかな。
どちらにせよ恥ずかしいのだけど、水分補給のためには耐えなければならない。普通の犬みたいに飲むのは無理だからこればかりは妥協するしかなかった。
最低限、マスクを外さなくても飲めるようにしてくれているのだから文句なんていえない。
冷たいジュースを喉の奥に流し込む。舌が抑えられているので、若干飲みにくかったけど、存分に喉を潤すことができた。
ふと見れば、仲良くなったヒトイヌの彼女も私の隣で美味しそうにジュースを飲んでいる。
ヒトイヌが二頭、並んで細い管に吸い付く光景は、中々にレアのような気がする。
もしかするとマジックミラーの向こうから見ている人たちに注目されているかもしれない。
途中でドリンクを放棄するわけもわけにもいかなかったので、最後まできっちり飲み切ったけど。
人心地ついた私たちは、再びクッションスペースへと移動する。彼女はクッションのひとつにのし掛かるようにして、楽な姿勢を取っていた。
（あ、それいいなぁ）
私も真似をして彼女の隣でクッションを抱え込むようにして楽な体勢を取った。ヒトイヌ拘束はどうしても四肢に負担がかかるから、こうしてクッションを使って手足を浮かせると楽なのだ。
彼女は嬉しそうな顔を私に向けてくる。それがあまりに人懐っこい笑みだったので、思わず私も笑顔を返した。目元だけしか見えていなくても同じ気持ちだということは伝わったはずだ。
自分と同じ、浅ましくも快楽に忠実な仲間。それと一緒にこうして過ごせる悦び。
ヒトイヌ公園に来て良かった。
私と彼女はそれなりに長い時間、そうやって寄り添って休んだ。
せっかく公園に来たのに、何もせずに寄り添っているだけなんてもったいないと思うかもしれない。
けれど、自分と同じヒトイヌと寄り添って眠るだけなんて贅沢は公園に来ないと出来ないことなのでいいのだ。
もし理解あるパートナーがいたとしても、同時に二頭のヒトイヌが世話されるのは難しい。
公園の外だとどうしても素性が関わってくるからね。その点、ヒトイヌ公園なら偶然出会ったヒトイヌとこうして穏やかに過ごすのも普通だ。
さっきみたいにじゃれあうのも楽しいし、一緒に散歩するだけでもいい。普通は経験出来ないことを出来るのが、

ヒトイヌ公園の醍醐味なのだから。
私と彼女は十分身体を休めた後、休憩所を出て外を散歩することにした。
その際は動き慣れている彼女が先導してくれた。目の前でふりふり軽快に揺れるお尻が可愛い。
時折芝生ゾーンで互いに身体を擦り合わせたりしてじゃれ合ったり、自由に遊んでいいボールを転がしてヒトイヌ式キャッチボールに興じたり、仲の良い姉妹犬のように過ごした。
けれど、楽しい時間はあっという間で。
(あ……そろそろ時間かぁ)
時計台を見て規定の時間が近付いて来たことに気づいた私は、遊んでくれた彼女に別れを告げる。時計を見て、首を横に振れば大体の意図は伝わった。
「くぅん……」
彼女も別れを惜しんでくれているのか、哀しそうに啼いてくれた。
(いつか、またね)
また会えるかどうかはわからない。来る時間が合うかどうかわからないというのもそうだけど、そもそも個体の識別が難しい。
向こうは顔の下半分を覆うマスクだからある程度は顔がわかるけど、私は全頭マスクを被っている。次に会っても私だとわからないかもしれない。
けれど、その一期一会もまた、ヒトイヌ公園の良いところだった。
いつかまた一緒に遊べると信じ、私は彼女と別れる。
(時間が微妙だけど……まあ、向かっていたら迎えに来てくれるかな)
私はお爺さんのアドバイスもあってだいぶ慣れた歩き方で最初に出てきた建物へと向かう。
その途中で、犬耳から声が聞こえてきた。
『時間となりました。これより係員が回収に参ります』
(やっぱり間に合わなかった……そういえばこうやって回収されるのは初めてね)
これまではあまり遠くにいかなかったっていうのもあるし、我ながら生真面目だから時間が来る頃には最初の施設に戻っていた。
係員が回収するという話だけは聴いていたけど、どうやって回収されるのかは知らなかった。
しばらくその場で待っていると、遠くから滑るように小さな車が近付いてきた。車、といってもどちらかといえばカートで、座っている場所はむき出しだった。そして、檻のような形の荷台がある。
「鈴浦様、お待たせしました。こちらに乗ってください」
係員の人はてきぱきと荷台を展開し、タラップで無理なく荷台に上がれるようにしてくれた。私は素直に従い、荷台の上に乗り込む。それが済むと係員が再び檻を組み上げ

る。自ら乗ったとはいえ、私は檻に入れられて荷台に乗せられているような形になる。
　そしてそのままカートは再び動き出した。トロッコと同じく揺らさないような技術が使われているのだろう。整備はされているとはいえ、野外の道を進んでいるのに伝わってくる震動は驚くほど小さい。
　檻に入れられ、晒されながら移動しているようなもので、かなり恥ずかしかった。すれ違う人やヒトイヌが注目しているのがわかるのだからなおさらだ。
　ヒトイヌ状態だとかなり時間のかかった道のりは、カートだとあっという間だった。
　建物が見えてくる。
　こうして、ヒトイヌの時間は終わったのだった。

　駅のホームを気持ちのいい風が通り過ぎていく。
　私は着衣が乱れないように軽く手で押さえながら、ホームで電車を待っていた。
　ヒトイヌ公園は私の生活圏からかなり離れた場所にある。電車をいくつも乗り継いでやっとたどり着く距離だ。
　正直、大変な道のりなのだけど、それだけの価値がある場所だから苦にはならない。今日も十分に堪能させて貰った。ヒトイヌの友達も出来た。
　ヒトイヌ公園の良いところは、非日常の時間が終われば、いつものように人間に戻れることだ。
　逆に悪いところは、時間が来るとあの夢のような時間が終わってしまうことなのだけど。
（次はご主人様を募ってみる……？　いや、まだちょっと怖いかな……）
　一時的にせよ、今後ずっと世話をしてもらうにせよ、まだそこまで踏み切るのは怖いというのもある。ご主人様という存在を得てしまったら、快感は何倍にもなるかもしれないけど、同時に公園から出ても自分が飼われるものであるという意識が消えなくなりそうだ。それは色んな意味でまずい。
　日常が非日常に浸食される覚悟は、まだない。
（いつかは……とか思っている時点でもう逃げられないかもだけど）
　自嘲気味の考えになってきたので、頭を振って気持ちを切り替える。
　それにしても今日の体験は思いがけず、他のヒトイヌとの交流が主になった。
　以前に来た時は他のヒトイヌとあまり出会わなかったのもあるし、出会ったのもすでにペアが出来ていた相手だったから、今回見たいに触れ合うことはなかった。
（そういえば、女の子のご主人様もいたわよね……）
　すでに成立しているペアには、やっぱり男女が多いのだけど、女の子同士のペアもいた。彼女たちが楽しそうにボ

ール遊びをしていたことを思い出す。ヒトイヌの方はすごく軽快に動き回っていて、本物の犬みたいだった。
（女の子のご主人様もいいかも……交互にヒトイヌになったりするのかな？）
そうだとすると、今日出会ったヒトイヌの子とそういう関係になれることもあるのかもしれない。
今日出会ったあの子も、今頃帰路についているのだろうか。それとも、実は公園に所属しているヒトイヌで、ずっとあの公園で暮らしているのだろうか。
ふと、向かいのホームに立つ制服姿の女子高生に目が留まった。
（……そうそう、ちょうどあんな感じの体格と髪型だったわね）
ヒトイヌ公園は原則未成年の入場を禁止している。ただし、保護者の許可がある場合はそうではない。
（なんとなく気になって帰りに受付で確認しちゃった……まあ、あの子があのヒトイヌなわけがないわよね）
真面目そうな子だ。可愛いブックカバーをつけた文庫本を黙々と読み進めている。かけているシルバーフレームの眼鏡は彼女の知的具合をさらに引き上げ、文学少女と呼んで全く差し支えない雰囲気を整えていた。
（ああいう真面目そうな子がヒトイヌになっているとしたら……いやいや、何を考えているのかしら、私は）
あのヒトイヌが普段どんな姿をしていて、どんな性格の子かはわからない。
けど、目の前のホームにいる少女のような感じで、周りにはあの非日常の世界を経験しているとは露とも知らせずに、日常を送っているのかと考えてみる。
私はなんとなく仲間がいつでも傍にいるような気持ちになって、穏やかな心持ちになれた。
ちょうどやって来た電車に乗り込みつつ、また次の休みもヒトイヌ公園に来ようと決心するのだった。

ヒトイヌ公園　ひとりの場合　終わり

ヒトイヌ公園　ふたりの場合

この公園に彼女と来るのは、もう何度目だろうか。

「早く早く！　急いで幸さん！」

いつも元気いっぱいの大葉ちゃんに手を引かれて公園への道を行く。大学生にしては子供っぽいけど、そんな彼女が愛おしくて仕方ない。

「公園は逃げないわよ？　大葉ちゃん」

そう呼びかけると大葉ちゃんがくるりと振り返った。

ショートカットの短い髪がその動作につられて揺れる。栗色の明るい髪は、太陽の光を透かしてきらきらと輝いていた。いえ、これは彼女の笑顔を眩しく感じる私の錯覚かもしれない。

太陽そのものの元気の良さで、くるくる変わる表情が愛おしい。私より少し低い背丈や、四歳という絶妙な歳の差もあって、本当の妹のような親しみがあった。

「でもでも、遊ぶ時間は減っちゃうよ！」

少しでも長く楽しみたいという彼女の気持ちはわからなくはない。

社会人の私と大学生の大葉ちゃんとでは、生活リズムや休みの日程などが合わないことも多い。私が土日休みの仕事ならもっと合わせやすいのだろうけど、残念ながらそうではなかった。

毎日のように通話しているけど、それでもやっぱり会える日は少ないのが現状だ。

そう考えると、あの公園で彼女と知り合い、そしてその後公園の外で再会できたのは奇跡だと思う。

彼女との奇跡的な出会いを思い返している中、私と大葉ちゃんはついにその公園へとたどり着いた。

常連としてもう何度も来ているその公園――ヒトイヌ公園に。

ヒトイヌプレイが公然と楽しめる有料公園。

それがヒトイヌ公園だった。

私と大葉ちゃんはその公園の常連であり、私たちの出会いもこの公園だった。

当時、まだプレイのパートナーを見つけられていなかった私と大葉ちゃんは、公園の専属調教師という人に二人揃って……いえ、二匹揃って躾けられた。

その日はたまたま調教師がひとりしかおらず、私たちも同意の上で一緒になったのだけど、犬として大葉ちゃんとじゃれ合うのはとても楽しかった。調教師もそれを理解してくれるベテランの人だったので、私たち二匹で弄り合うようなプレイを積極的に施してくれ、終了時間になることにはすっかり仲良くなっていた。

でも公園内で互いの素性を明らかにするのは、公園のマナーに違反する。基本的には一期一会というのが公園の指

針だった。
　当時の私たちは顔までしっかり覆った形のヒトイヌ拘束を施されていたし、相手のことは背丈や体格くらいしかわからなかった。だから二度と会うことはないはずだった。
　けれどある時、満員電車に乗った際、偶然にも大葉ちゃんも同じ車両に乗り合わせ、私と彼女は再会を果たした。
　押しつけ合った身体の感覚でその時のことを思い出し、まさかと思って彼女の様子を伺っていたら、向こうも同じ事を考えていたというのだから驚きだった。
　ホームに降りた後、声をかけるでもなくお互いに相手の出方を伺っていた様子は、周りから見れば奇妙だったに違いない。
　私が思いきって調教師の方の名前を出してみたら、大葉ちゃんはすごい勢いで食いついてきて、それでお互いがあのときのヒトイヌだと知れた。
　感極まった大葉ちゃんが抱きついてきて、一時場が騒然としたのは懐かしい思い出だ。
　それから私たちは連絡先を交換して、毎日通話で語り合い、一緒にヒトイヌ公園に行く仲になったのだ。

「ようこそ、ヒトイヌ公園に。……説明は省略でもよろしいですか？」
　ヒトイヌ公園の受付に行くと、相手の事務員の人も私たちのことはよく覚えているらしく、開口一番そう聴いてきた。
「ええ、大丈夫です」
「私も大丈夫です！」
　私も大葉ちゃんも勝手知ったる公園の注意事項を聴く必要はないと思っているので、事務員の言葉に頷く。
「承知いたしました。それでは、本日はどちらがヒトイヌとなられますか？」
　私たちは片方がヒトイヌになって、片方は飼い主という役割で遊ぶことが多い。
　二人揃ってヒトイヌになって遊ぶのも楽しいのだけど、やはり体を拘束する関係上、自由が利く部分は限られてしまう。
　その点、片方だけがヒトイヌになるのであれば、もう一人の方が世話を焼くことが出来る。遊びの幅も広がるため、基本的にはどちらか片方がヒトイヌになるというのが私たちのお決まりだった。
　どちらがヒトイヌになるかは、その時の体調が最優先として、基本的には代わり番こということになっている。
　そして今回は。
「大葉ちゃん、それじゃあ悪いけど……お願いね」
「はい、わかってます！　順番ですもんね！」
　私がヒトイヌになる番だった。大葉ちゃんはニコニコ笑って受け入れてくれている。

事務員にそのことを告げると、素早くひとつの鍵が手渡された。それは更衣室の鍵であり、そこには私たちの使う拘束具の入ったロッカーがある。

「それでは、ごゆっくりお楽しみください」

必要な手続きを済ませて、私たちは更衣室に向かう。

更衣室に入って鍵を閉めると、そこは私と大葉ちゃんだけの空間になる。

「よーし、幸さん……じゃなくて、サチ！」

荷物をロッカーに預け、代わりに引っ張り出した拘束具を作業台の上に並べながら、大葉ちゃんが——いえ、ご主人様が私を見つめる。

「始めよっか！」

私は答える代わりに、身に纏っている服を脱ぎ始めた。年下の女の子が見ている前で、言われるがまま服を脱いでいく——普段の私なら考えられない行為だ。

それでも、この日、この時だけはその行為を受け入れられる。いまの私はまだ不完全とはいえ、立場はもう彼女の『犬』なのだから。

心臓の鼓動が早くなっているのが、触れなくてもわかる。幾度となく経験してきたこととはいえ、恥ずかしさが軽減されることはない。

そして恥ずかしいのと同じくらい——期待してしまっているのだ。

わたしの目の前で幸さんが——ううん、サチが服を脱いでいく。

幸さんを象徴するような、知的で素敵な服が床に脱ぎ落とされ、幸さんがサチに変わっていく。それが本当の姿、なんてことは言わない。

人間としての幸さんも、ヒトイヌとしてのサチも、どちらも本当で、どちらもあってこその幸さんなのだから。

それにしても、いつもと変わらず、サチの身体はすごく綺麗だった。

艶やかな黒髪もそれに華を添えている。サチの髪は腰に届くか届かないかくらいの長さで、思わず触れたくなるような艶やかさを持っている。実際に触れれば絹のような手触りで、同じ女性として憧れを抱かざるを得ない。

サチの背丈はわたしより少し高いくらいで、包容力のある乳房や、きゅっと引き締まった腰、安産型のお尻と、全体的に滑らかなカーブを描いている。

女性としての魅力に満ち溢れた身体といえばいいのだろうか。決して太っているわけじゃなくて、健康的に肉が付いているという感じ。男の人からすればもっと細い方がいいのかもしれないけど、少なくともわたしにとっては、サチの身体はすごく魅力的だった。

そうしてすべての服を脱いだサチの肌は、仕事がデスクワークなこともあるのか、あまり日に焼けていない。

輝かんばかりの白さと艶をしている。
もしサチが本物の犬だったら、さぞ綺麗な白い毛並みの犬になるんだろう。いや、黒髪が反映するとしたら艶やかな黒い犬かな。どっちにしても綺麗だろうけど。
わたしの前で素っ裸になるということに興奮しているのか、その白い肌がほんのり紅潮している。それが可愛くて愛しくてたまらない。
わたしはサチの脱いだ服をすべて拾い、丁寧に畳んでロッカーにしまう。ガチャリとわざと大きな音を立てて扉を閉めた。自動的に鍵がかかる。
サチの肩がびくりと跳ねるのを視界の隅で確認しつつ、改めてサチに向き直る。
「それじゃあ、まずはこれからだね」
手にとって示したのは、全身タイツのようなラバースーツだった。首から下を包み込む。どういうヒトイヌ拘束を施すかは、その時々の『遊び』によるのだけど、今回は全身を余すことなく、ラバーに包むことにしていた。
サチを手伝いつつ、まずは手足の先まで覆うラバースーツを着てもらう。潤滑油も活用しながら、しっかりフィットするようにスーツを着せた。背中側のジッパーを引き上げると、サチの身体にラバースーツがぴっちり張り付き、その女性的かつ綺麗な身体のラインを強調する。
このラバースーツは柔らかな素材で出来ているけど、乳房の保護に関しては結構しっかりされていて、巨乳の分類に入るサチの乳房が揺れて痛くならない優れものだった。
一度ラバースーツなしの四肢拘束だけで遊んでみたことがあるのだけど、走り回ると乳房が揺れて痛かったらしく、そのときサチは元気に動き回ることが出来なかった。その経験から、動き回る予定があるときはいつもラバースーツを着て貰っていた。
このラバースーツを着ていれば、乳房が揺れて痛くなる心配はない。
ラバースーツを着ると、サチの身体の中で、ラバーに覆われていないのは首から上だけになってしまった。
「サチ、四つん這いになって」
素直に従って四つん這いになるサチ。わたしはまず両足を曲げさせ、膝のあたりにクッションが当たるようになっている袋をその足に被せた。袋の口はベルトで締め、足の付け根と足首が接する形で固定する。膝に当たる部分のクッションは分厚く、膝の形にくぼんで位置を固定するから、ずれる心配はないはずだった。
しっかり両足を固定して、外れないようにベルトを南京錠で固定する。これでわたしが外そうとしない限り、サチは両足を拘束から解放することができなくなったわけだ。
同じようにして両手も固定する。そのままだと脱げてしまうかもしれないので、左右の袋を背中側に回したベルトを交差させながら繋いで、脱げないようにする。
（可愛い……）

本来わたしより背が高いサチが、コンパクトに手足を曲げて小さくまとまっている。
犬と同じように、低い視点からわたしを見上げることになるので、自然と目線が上目遣いになり、可愛さ倍増だった。大人の幸さんに「可愛い」なんていうのは失礼だけど犬のサチを「可愛い」と思うのは自然なことだ。
全体のフォルムがかなり犬に近付いていた。早速撫で回したくなるけど、我慢我慢。
まだまだ取り付けるべき装備があるのだから。

軽く身体を捩るだけで、全身が締め付けられるような感覚がある。
ラバースーツは私の身体のほぼ全てを覆い、四肢の拘束は厳重にされていて、女の私の力ではどうしようもなくなっていた。
大葉ちゃんは楽しげに準備を進めているけど、私はすでにすっかり犬のような気分で、それに対する興奮が高まり続けていた。
まだ何もされていないのに呼吸が荒くなりそうで、必死に普段通りの呼吸を心がける。
「サチ、口を開けて」
そう大葉ちゃんに言われて口を開けると、轡を噛まされた。それは犬の口のフォルムをしたマスクと一体になっているもので、轡を噛むと犬の口を模した部分が開き、ある程度のものを咥えられるようになっている。
人間の口の構造ではテニスボールを咥えるのは無理だけど、この犬マスクを用いればその程度の大きさのボールなどの道具を使った遊びが出来るというわけだ。
顔の下半分を覆う形であるため、全頭マスクよりは息苦しくなく、身バレも防ぎ易く、行きずりの相手とも遊びやすいということで人気のマスクだった。
マスクは後頭部に回したベルトを、うなじの上辺りで固定される。その際、髪の毛をアップにする必要があるので、大葉ちゃんが私の腰くらいまでの髪をポニーテールのようにまとめてくれていた。犬なのにポニーというのも変だけど仕方ない。
いっそヒトイヌプレイがやりやすいように、髪を短くするべきかと思うのだけど、大葉ちゃんからは猛反対を受けてしまった。むしろもっと長く伸ばすべきだとも言われたのだけど、さすがに社会人としてはいまでも十分長くすぎると思っているので、いまくらいの長さで留めている。
マスクをしたら、次は耳当てを被せられた。ヘッドホンのような形のそれは本来の耳を隠すと同時に、三角形の犬の耳飾りも付いている。さすがに耳が動くような機能はないけど、これがなければ犬っぽくないから必須の装備だ。
耳当てはマスクと接続してしっかりと固定出来るようになっている。

そのため、多少乱暴に頭を撫でても外れることはない。
こうして私は、どんどん犬の格好に近付いていた。
そしていよいよ、あの場所に関する装備を大葉ちゃんが手に取る。
それは、凶悪な大きさのアナルプラグと一体になっている尻尾飾り。
プラグは大葉ちゃんの拳ほどの大きさがあり、そのままじゃどう考えても私のお尻には入らない。大葉ちゃんが尻尾を引っ張ると、プラグが急速に萎んでピンポン球くらいのサイズになった。もう一度大葉ちゃんが引っ張ると、小さくなったアナルプラグが大きくなる。その際、大葉ちゃんはプラグを手で握って、膨らむ際の圧力が問題ない強さであることを確かめていた。
そして問題ないことを確認したのか、再度プラグを小さくして、それを大葉ちゃんが口に含む。
「はむ、はふ……」
唾液を眩し、潤滑油にするつもりなのだろう。消毒はされているとはいえ、何度も私のお尻に入れているものを、ためらいなく口に含んでくれる大葉ちゃんの愛情が感じられた。
「ん……いいかな。サチ、お尻向けて」
私は恥ずかしい思いをしながらも、大葉ちゃんの言葉に従ってお尻を向ける。
お尻に大葉ちゃんの手が添えられるのがわかった。
ラバースーツはぴっちりと全身を覆っている。けれど、一カ所だけ穴が空いているところがあった。それが、ちょうど肛門に接する位置だ。
普段はラバーの性質もあって穴がないように見えているけど、実はそこには穴が空いている。
ラバーには伸縮性があるため、ピンポン玉のサイズくらいなら、押しつければ穴は広がってそれを内側へと受け入れてしまう。
「少し息んでね」
大葉ちゃんに言われるがまま、肛門に力を入れる。
穴の空いている場所は肛門に接している場所のため、アナルプラグは過たず私の肛門を貫いて、私の中にまで入り込んできた。括約筋を通過する際に強い抵抗があるけど、唾液によって滑りが良くなったそれは一番狭い部分をあっさり越えて奥へと入り込んでくる。
「ひぅ……っ」
その感覚に、意図せず呼吸が乱れる。
「うん。奥に入ったね。それじゃあいくよ……っ」
大葉ちゃんの合図と同時に、尻尾が引かれた。
そして、さっき見た通りに、身体の中でアナルプラグが膨らむのがわかった。
「っ、く、ふっ、ぅッ！」
膨らんだ柔らかなアナルプラグは、直腸の形に合わせてその場所を全て占拠し、便秘したときのような異物感をは

つきりと生じさせてくる。
　この公園には括約筋を締めたり緩めたりすることで尻尾飾りを左右に動かすことの出来る機能があるプラグもあるけど、私たちはこのプラグの感覚が好きでこちらの方を愛用していた。
　尻尾自体に動くギミックはないけど、お尻を振ることで尻尾を振ることはできるし、その方がヒトイヌとしての動きが可愛い、というのが私と大葉ちゃんの一致した意見だった。
　前の性器にはなにもしない。片方が自由に動ける以上、そういうことをするときだけ刺激を与えた方が気持ちいいというのが理由だった。
　そして、最後の道具に大葉ちゃんが手を伸ばす。

　犬耳も尻尾もついて、サチはすっかりヒトイヌらしくなっていた。
　わたしは最後に装着する道具を手に取り、サチの前にしゃがみ込む。
「サチ、顔をあげて」
　いつもは年上らしい威厳と理性に溢れた顔が、すっかりヒトイヌの快楽に捕らわれた雌犬の顔になっていた。
　潤んだ目といい、震える視線といい、可愛く愛しい、飼い犬のサチの顔だ。
　わたしはその鼻先にキスをする。そして、そのサチの首筋に首輪を巻き付けた。
　『サチ』と刻印されたプレートのついた首輪。特注して作って貰ったもので、機能自体は公園で使われている普通の物と大差ない。
　その首輪にリードを繋いで、その先をわたしが握る。
「じゃあ、行こっか」
「クゥン！　ウゥッ」
　わたしの呼びかけにサチが唸り声で応えた。パクパクと犬の口が開いたり閉じたりして、必死に意思を伝えようとしているのが感じられる。
　立ち上がると、サチの視点はわたしの遙か下になる。本当はわたしの視点の方が下のはずなのに。
　歩き出すと、サチは頑張って手足を動かしてついてこなければならない。わたしが普通の速度で歩いても、サチは一生懸命手足を動かさないと付いて来られない。
　サチを苛める気はもちろんなかったけど、軽くリードを引いて遅れ気味なサチを促した。
「ほらほら。がんばってね」
　これも含めてプレイだからね。サチはますます必死になって手足を動かす。短くなった手足がパタパタと動くのは可愛らしいものだった。
　そうしている間に、公園側の入り口に着く。サチが追いつくのを待って、扉を押し開けた。その先には、芝生の公

園が広がっている。
　これだけ広い野外で存分にヒトイヌプレイが出来る場所なんて、わたしはここ以外知らない。だからこそ休みの度に来る価値があるのだけど。
　舗装された道に、しっかりと整備された芝生の広場。殺風景にならないように、程よく茂みや植え込み、要所要所には東屋なんかもあったりして。
「この公園は相変わらず広いねー。誰が維持費を出しているんだろうね？　……そんなに利用者がいるとは思えないんだけどなぁ」
　サチに言っても応えは当然返ってこない。ただ、その視線が「そうね」と同意してくれているのは、言葉がなくてもわかった。
　わたしはサチを伴って、散歩を始める。まずはもう少し奥に行って、それから芝生の広場で遊ぶつもりだった。
　その道中、別の利用者さんとすれ違う。その利用者さんは男女のペアで、優しそうな男の人が、顔も見えないくらい厳重に拘束されたヒトイヌの女の人を連れていた。
　人によっては他の利用者と関わり合いになりたくないという場合もあって、その際はその意思を表すタグをつけている。そのペアはそれをつけていなかったから、わたしはマナーに則って挨拶をした。
「こんにちは」
「こんにちは。今日は日差しが強いですから、外で遊ぶならヒトイヌだけじゃなく、貴女も水分補給を怠らないように気をつけて」
　そういう男の人の手には、ペットボトルの水が握られていた。中身が半分くらいになっている。
「ありがとうございます。気をつけます」
　軽く会釈しながらすれ違う。
　ふとサチを見ると、顔を真っ赤にして恥じらっていた。
　そういえば男の人の視線がさりげなくサチの胸に行っていたかも。
　ラバースーツ越しにもサチの胸は大きいとわかるから無理もない。
　自然と視線を吸い寄せてしまう立派なものを持つサチの身体は、飼い主のわたしの自慢でもある。犬でいうところの、毛並みを褒められたようなものだ。
「うふふ……サチのおっぱいは大きいから、すごく見られていたね」
　あえてそう口に出して指摘してあげると、サチはますます顔を真っ赤にして俯いてしまった。ちょっと意地悪だったかな。
「ほら、恥ずかしがってないで、行くよサチ」
　首が絞まらない程度に軽くリードを引き、サチを促して先へと進む。
　ほどなくして、目的の芝生エリアにたどり着いた。そこはヒトイヌ公園内の運動場とも言える場所で、入り口から

もほど近く、人気の野外スポットのひとつだった。
そこに着くまでの道のりで、サチの額に汗が滲んでいるのを、わたしは確認する。
（確かに日差しが強い……先に水分補給させておいた方がいいかな）
そもそも、全身をほぼラバーに覆われた状態だと、どうしても中に熱が籠もってしまう。
いまは寒くもなく熱くもない日和だからいいけど、これが真夏になるとどうなるか。大量の汗をかいて一気に干上がってしまいかねない。
それを防ぐためにも、水分補給に関してちゃんと注意を払うのが、飼い主の責任というものだった。
「サチ、水飲んでおこっか」
「ウー」
喉の渇きを感じていたのか、サチが嬉しそうにわたしを見上げる。視線だけでわたしにはわかったけど、ヒトイヌの嗜みとして素早くお尻を左右に振って、尻尾を揺らして喜びを表現するのも忘れていない。
そんな可愛いサチを連れ、わたしは近くの東屋に移動した。東屋は普通の公園と同じように壁のない休憩所という感じで、ベンチがあるのと、自動販売機が置いてある。
ミネラルウォーターを購入して、わたしはベンチに腰掛ける。その正面に、サチが来て、両前足を持ち上げ、わたしの座っている場所の左右にその足を置いた。真正面から犬にじゃれつかれているみたいな気分になる。
「わわっ、焦らないで。いまキャップを代えるから……」
さっきのヒトイヌは口枷が配水管みたいなもので塞いでいる円形のゴム栓さえ抜けば、そこから水を流し込める構造をしていた。
けれどサチの口枷は犬のマスクの部分が開閉する機構があって、ただ水を流し込むだけだと溢れて零れてしまう。それを防ぎつつ水分補給をするため、わたしたちはちゃんと対策を持っていた。
それが、キャップにゴムチューブのようなものが通されていて、ストローのようにペットボトルの中身を吸い上げることの出来る道具だった。登山をする人なら似たような道具を知っているかもしれない。
そのチューブの先端を、慎重にサチの口の中に入れる。轡の隙間からチューブを挿し入れれば、あとはサチが自由に吸うことが出来た。轡も同時に噛んでいるわけだから空気が入り込む隙間があり、普通のストローと同じように吸えるわけではなかったけど、水分補給が目的なら十分な勢いで吸える。
水を一生懸命ちゅうちゅう吸うサチは、ものすごく可愛かった。
「美味しい？」
その問いに対する応えは、左右に振る尻尾だった。形のいいサチのお尻が揺れる。

その様子がまた可愛すぎて、思わず抱きしめたくなる。というか抱きしめた。

重厚なラバースーツに包まれたサチの身体はそれでも軟らかく暖かくて、いっそこのまま昼寝でもしたくなる。

けれどせっかく公園に来たのだから、とその誘惑を振り切り、わたしはサチを離して立ち上がった。

「よーし、遊ぼ！　サチ！」

わたしは休憩所に置いてあったボールを手に芝生へと走り出す。少し遅れてサチもがんばって付いてくる。

「ほら、持ってきて！」

ある程度離れたところで振り返ったわたしは、サチに向かってボールを放った。ボールは芝生の上を転がり、サチの傍まで行く。

サチはその犬型マスクを大きく開かせてボールを咥え、わたしの足下まで歩いてきた。

翳した掌の上でボールを離し、わたしの手にボールが収まる。

「ふふっ、いい子いい子！」

わたしはボールを持っていない方の手でサチの頭を撫でてあげる。サチは気持ちよさそうに目を細めていた。

サチは頭を撫でられるのが好きだ。普段のお姉さんらしい幸さんからは連想できないけど。

真面目でしっかりしている人ほど、本当は人に甘えたいと思っているものかもしれない。

わたしなんかは普段幸さんに甘えまくっているから、こういう時は思いっきりサチを甘やかしてあげることに決めている。

「ほい、取って来て！」

ひとしきり撫でた後、わたしはボールを軽く放る。あまり遠くには放らない。普通の犬ならそれくらいしないと運動にならないけど、サチには数メートルの往復移動でも十分な運動になるし、長距離を移動させるより、短い距離を何度も移動させた方が、撫でる回数も多くなるからだ。

何度もボールを投げて『取ってこい』を繰り返していると、サチの額に大粒の汗が滲み始めた。

いまは日差しがそこまでキツくないけど、全身ラバーに覆われた状態で、ほぼ全身を使った移動を繰り返しているのだから無理もない。

轡越しの呼吸は決して楽ではなく、呼吸もどんどん荒くなる。犬型のマスクは呼吸制御を目的としているわけではなかったけど、轡を噛み締めて開いておかなければ息はマスクの内に籠もり、息苦しさが増すばかりだろう。

かといって口を開き続けるために顎に力を入れるのも限度というものがある。

「フゥー……！　フゥー……！」

激しい呼吸音が響いている。それがまた犬らしくてとても良かった。

「よーしよし、ちょっと休憩しよっか！」



わたしがそう言うと、サチは力尽きたようにその場に横倒しになった。そのままひっくり返ったカエルみたいな体勢で芝生に寝転がってしまう。

もう外聞を気にする余裕もないのか、手足を広げて荒い呼吸を繰り返している。わたしはそんな状態のサチに悪戯心が刺激され、そのすぐ隣にしゃがみこんだ。

そして、人差し指でつんつんとサチの乳房を突っついてみる。サチは一瞬ぴくりと腕を動かしたけど、持ち上げる元気もないのか、相変わらず無防備に両腕を広げた体勢から動かない。

それを良いことにわたしはさらにサチの身体の至る所を突っついた。

頬、腋、お腹と突っつく度にサチがいい反応をしてくれるので、つい調子に乗って何度も突っついてしまった。突く度にぴくぴく反応するあたり、妙にエッチだ。

わたし自身も経験したことがあるのだから、そういうことをされた時にどう感じるかは熟知している。

いまの刺激を与えた結果、あの場所がどうなっているかなんていうことは容易に想像の付くことだった。

それでなくとも、散々運動させた結果、ラバースーツの中は汗と体温で蒸れて濡れていることは間違いなく、その状態で全身を動かせばどんな感覚を発生させることになるのか。わたしも体験したことがあるからよくわかる。

わたしは手を伸ばして、サチの股間のジッパーを引き下げる。ぱっくりと開いたそこからは女性の匂いというべきものが零れだしているかのようだった。さすがに水蒸気のような見える形では出てこないのだけど、熟成されたものが溢れる気配は確かにした。

そこは同性のわたしから見てもイヤラシい状態になっていた。ちょっと触れたらどろりとしたものが溢れてきそうな雰囲気を感じる。

わたしがゆっくりと指を触れさせてみると、思った通りじんわりと濡れに濡れた感触が返ってきた。感覚が鋭敏になっているのか、だらりと脱力していたサチの身体が小さく跳ねる。いままで蓋をされて封じられていたところに対し、いきなり指の刺激は強かったみたいだ。

けれどこちらに向けられたサチの目にわたしを非難する光はなく、むしろ「もっと触れて欲しい」、「触って欲しい」という純粋なる甘えの感情が滲み出ていた。

そんな風にサチに甘えられたら、わたしがすることはひとつだ。

その場所に再度指を触れさせ、表面だけでなく、奥に向かって指を入れていく。ずぷずぷと指を飲み込んでいくサチのそこは指一本しか入れていないのに、強くわたしの指を締め付けてきて、まるでそこだけ別の生き物みたいにわたしの指を飲み込もうとしてきた。

それがわたしの錯覚なのか、それとも実際にそういう力が膣内に働いているのかはわからないけど、とにかくエッ

チな穴としか言い様がなかった。
それだけ強くサチの身体が突き入れられるものを求めているということがわかって、もっと愛おしくなる。
一度指を抜こうとしたら、逃さないとばかりに締め付ける力が強くなる。それでも無理矢理引き抜くと、大きな抵抗感があって、抜ける寸前、サチが背中を弓なりに反らして絶頂した。
指を一本入れて引き抜かれただけで絶頂してしまったサチに、思わず震える。どれだけ性的に高まっているのかかわかるだけに、羨ましいという気持ちさえ湧く。
けれどいまのわたしはご主人様。サチを気持ちよくしてあげることが役目だ。
今度は指を二本合わせて、その場所にゆっくり突き入れていく。
慎重に愛撫して、徐々に徐々に奥へと進んでいく。
すっかり出来上がってしまったサチは、わたしの指を痛いくらいに締め付けつつもさらに奥へ奥へと促すように腰が動いていた。
それに応えて指を根元までサチの中に入れてしまう。
特別な道具もなにも使っていないのに、サチの感じようはすごかった。首を左右に振り、本能的に轡を強く噛んでしまうのか、犬の口が大きく開いている。
「フシュー！　フシュー！」
そのせいで荒い呼吸音が余計に大きく聞こえて、サチがどれほど興奮しているのかがはっきり伝わってくる。
軽く指を前後させているだけで、サチは激しく身体を捩らせ、呻き、どんどんその興奮を高まらせていく。私も途中から夢中になって指を動かし続けた。
何度も、何度もサチが絶頂し、潮を噴いて悶え続けた。
そして、何度目かもわからない絶頂を迎えた時、サチが一際大きく身体を弓なりに反って痙攣した。
「クゥウウウ、ッ、ウゥッ！」
大きく唸ったサチの全身から力が抜け、静かになってしまった。
「サチ？」
絶頂しすぎたせいで気絶してしまったのかもしれない。
わたしの指はサチのあまりの締め付けによって半ば感覚が麻痺していた。
わたしは慎重に、あまり刺激を与えないようにサチの中から指を引き抜こうとした。
サチに意識はないはずなのだけど、抜こうとしたのを察知してか、弱々しい力で締め上げてきた。いまだ貪欲に快楽を求めているサチの身体に苦笑いを浮かべる他ない。
ようやく指を引き抜いた瞬間、サチはぶるりと身体を震わせた。
「サチ……大丈夫？」
意識があるのかどうかもわからなかったけど、サチにそう呼びかける。サチは、はしたない格好で身体を広げたま

ま、動かなかった。完全に意識を失っている。
「あちゃあ……やりすぎちゃった……」
まだ滞在する時間はあったけど、サチがこうなっては仕方ない。
わたしは周囲に人がいないことを確認してから、一端サチをその場に放置し、さっき休憩した東屋の中に用意されていた緊急用の電話を使う。
「……もしもし。ちょっとやりすぎてしまって、サチが……パートナーが動けなくなってしまいました。すみませんが、手を貸してください」
『承知しました。すぐ係のものが参ります』
即座に応じてくれた従業員の人がそう言ってくれて、待つこと暫く。
音もなく台車を牽いて、従業員の人たちがやって来てくれた。従業員の人たちはマスクと目深に被った帽子で顔を隠していて、一人の人間としてではなく、公園の従業員だということを強調していた。
サチの傍に座って待っていた私の傍にやってくる。
「当施設をご利用ありがとうございます。救護に参りました」
「すみません。お手数をおかけします。でも気絶しているだけなので、運んでくださるだけで大丈夫だと思います」
「承知しました」
従業員さんは手早くサチの首筋の脈拍や呼吸などをチェックし、本当に気絶しているだけなのかどうかを確かめていた。素人が判断するより確実だろうから、わたしも否やはない。
その後、従業員さんたちは持ってきてくれた担架を、サチの隣に置いたかと思うと、ささっと手早くサチを担架の上に移動させ、そしてスムーズに台車まで運んでいった。
台車の上には大きな檻がおいてあり、その檻は従業員の人たちが何かすると瞬く間に四方の壁がばらされた。
そうしてサチが台車に寝かされると、再び組み上げられて、気づけば檻の中にサチがいる形になった。
従業員の人たちは無駄話ひとつせず、受付のある建物に向かって移動し始める。台車はどういう作りをしているのか、上に乗っているサチにほとんど震動を与えていないようだった。車輪の転がりようも静かで、まるで空中を滑っているかのようにサチが運ばれていく。
わたしはその後ろを着いて歩きながら、残り時間をどうしようか考えていた。

ふと目を覚ますと、そこは屋内だった。
身体がとてもだるい。記憶を辿って何をしていたかを思い出そうとしていると、視界に大葉ちゃんの顔が不意に入り込んできた。
思わず驚いてしまったのは、大葉ちゃんが急に現れたか

ら、というだけではなく。
「わんわんっ！」
楽しそうに犬の鳴き真似をする大葉ちゃんが、ヒトイヌ拘束を施された状態になっていたからだった。犬のフォルムを模したマスクはしているけど、口枷はしていないようで、犬の鳴き真似が軽快に響く。
大葉ちゃんは普段から活発な子で、それはヒトイヌ拘束を施された時でも変わらない。
ふりふりと尻尾飾りを元気に振り、喜びを露わにする大葉ちゃんは可愛い。
思わず手を伸ばして彼女の頭を撫でてから、手が普通に動いたことに驚く。
いつのまに私はヒトイヌ拘束から解放されたのだろう。
「お目覚めになられましたか」
突然大葉ちゃん以外の人の声が響き、私は心臓が飛び出すかと思うほど驚いた。
声のした方をみれば、そこには公園の従業員の女性が立っていて、厳かに私たちに向かって一礼する。
「大葉様より伝号を承っております。『やりすぎてごめんね。お詫びに残り時間はわたしを幸さんの好きにしていいよ！』とのことです」
「わんわんっ！」
従業員の言葉を肯定するように、大葉ちゃんが啼く。いまの大葉ちゃんの拘束では口が塞がれているわけではないから、本当は伝言を残す必要もないのだけど、そこはルールに従ってのことだろう。大葉ちゃんはそういうところはかなり律儀なのだ。
「そ、そうなんですか……ありがとうございます」
「伝言は以上です。残り時間、ごゆるりとお楽しみくださいませ」
従業員さんはもう一度私と大葉ちゃんに向かって深々と礼をすると、そのまま部屋を出て行った。素早い。無闇に気を遣わせることがないようにという配慮だろう。
ふたりきり――いや、一人と一匹になった私と大葉ちゃん。私はじゃれついてくる大葉ちゃんを宥めながら、身体を起こした。
どうやら、更衣室の床にマットを敷いて寝かされていたようだ。
「そっか……私気絶しちゃったのね。大葉ちゃん、ごめんね」
「くぅん……」
大葉ちゃんはうなり声をあげながら、むしろ恐縮しているように身体を縮めた。これはおそらく「やりすぎちゃったのはこっちだから気にしないで！」という意味だろう。
私は改めて自分の身体の状態を確認する。
ヒトイヌ拘束は完全に解かれていて、来たときの服に戻っていた。全身から気怠さは感じるものの、汗などによる不快感はないところを考えると、寝ている間に身体を拭い

てくれたのだろう。妙にすっきりしている。
「大葉ちゃんが着替えさせてくれたの？　ありがとう」
「わんっ！」
元気よく応えた大葉ちゃんが、その頭を私の胸に埋めるようにしてすりつけてくる。
ぺろりと軽く頬を舐められた。
「わっ。……ふふ、こらこら」
私もヒトイヌになっているときはなるべく犬っぽい行動を取るようにしているけど、大葉ちゃんには敵わない。時々本物の犬に擦り寄られている感じさえするのだから、これはもう甘える才能という奴なのかも。
大葉ちゃんは私がさっきまで身につけていたヒトイヌ拘束をほぼそのまま身につけていた。違うのは言葉を奪う口枷を着けていないことくらい。これはたまにあることだった。
どうしても照れが残ってしまう私は強制的に言葉を奪う口枷がある方がヒトイヌでありやすいというか、気が楽なので必ず着けてもらうようにしている。ボール遊びとかもやりやすいし。
けれど、大葉ちゃんはいまみたいに犬の鳴き真似をすることに抵抗がさほどなく、日によって口枷は着けたり着けなかったりする。今回は口枷なしの気分なのだろう。
一応、この施設のことは信頼しているとはいえ、他の利用者に対する身バレのリスクを考えると顔や声は隠した方がいいことは確かだ。
だけど、代わり番こでヒトイヌになっている私たちに関しては今更かもしれないとは思っている。
あまりそういうタイプのペアはいないらしくて、利用者の中でも目立っているみたいだしね。
まあ、私に対してはともかく、大葉ちゃんに余所でちょっかい出してくるような人がいたら、容赦しないけど。
ふふふ。
「くぅーん……」
あ、しまった。万が一のことを考えていたら思わず大葉ちゃんを怯えさせてしまった。
「ごめんなさい。なんでもないから」
じっと見上げてくる大葉ちゃんの目がこちらを伺っている。私はごまかす意味も含めて大葉ちゃんの頭を撫でてあげた。大葉ちゃんは気持ちよさそうに目を細めている。
犬耳は耳当てと一体化していて、マスクと合わせて固定するようになっている。そのため、滅多に外れるものではないのだけど、ずれたりしないように慎重に撫でた。
それでなくとも撫でられるのが嬉しいからか、ぐいぐいと積極的に頭を押しつけてくるから力の調整が大変だ。
「さて……と」
私は時計を見る。滞在時間はまだ十分残っているとはいえ、いまから他の施設に行ったり、外をのんびり歩いたりする時間はなさそうだった。

「大葉ちゃん、プライベートルームに行きましょうか」
にこりとした笑みを意識して、大葉ちゃんに提案する。
「ぅ……わ、わんっ！」
大葉ちゃんは少し恥ずかしそうに頬を染めたけど、すぐに元気のいい返事をしてくれた。
プライベートルームと名付けられてはいるけど、要はパートナー同士で愛し合うための個室のことだ。

ヒトイヌ公園内ではほぼ全ての場所で安全確保のため、常にモニタリングが行われている。
その際に記録された映像は、利用者の同意を得た上で公式の宣伝ムービーやパンフレットなどに使われることもあると、利用規約に明記されている。
つまりヒトイヌ公園内で遊ぶ限り、基本的には常に誰かに見られているわけだ。そのこと自体はフリーのヒトイヌの安全確保や、ルールに違反する者を取り締まる必要もあるし、仕方ないことだと思う。
けど、私たちみたいに特定のパートナーと愛し合うための手段のひとつとして、ヒトイヌプレイを選択している場合には、やっぱり他の人の目を気にしなくて済む場所が欲しくはあるわけで。
そのために用意されているのが、そういう監視機能のない個室だった。使用するのにペアでなければならなかったり、追加料金が必要になったりと制約はあるものの、二人っきりで落ち着いて愛し合いたい場合はそこを利用するのが一番というわけだった。
私は大葉ちゃんにリードを着け、まずは受付に個室の使用許可を求めに行くことにする。
部屋から出ると、大葉ちゃんはその短くなった手足を器用に素早く動かし、私を逆に引っ張るほどの速度で廊下を移動し始める。もしリードのテンションが張ってしまったら首が絞まるのは大葉ちゃんなのだけど。
「待って、待って大葉ちゃん！」
慌てて早足になって大葉ちゃんを追いかける。
大葉ちゃんはそんな私の反応が面白いのか、楽しそうに啼いていた。
建物内の短い距離とはいえ、たどり着く頃には気疲れで私の方の息が切れていた。
「お元気ですねぇ」
受付の人に苦笑いを浮かべられてしまった。ちょっと恥ずかしい。大葉ちゃんはカウンターの影になって受付の人の視線が遮られているからか、平気な顔をしていたけど。
ちょっと憎たらしくも、それ以上に愛らしい子だった。
「個室を使用したいのですが」
「はい。通常の部屋でよろしいですか？」
この場合の通常かそうでないかの違いとは、要はプレイ用の小道具が充実しているか否かの違いだ。私たちは普段

からそこまで道具を用いたプレイはしないから、普段通り通常の部屋を申請した。
渡してもらった鍵には、噛んでも平気な、骨を模したおもちゃのキーホルダーがついている。この公園のこういうユーモアの利いている感じは嫌いじゃない。
「大葉ちゃん。はい、お願いね」
「わんっ」
大葉ちゃんが口を開けてその骨のおもちゃを咥えた。大葉ちゃんに持って行かせる意味はないのだけど、そこはプレイの一環でもある。
「ごゆるりとお楽しみくださいませ」
受付の人の礼を尻目に、私たちはプライベートルームへと向かう。
部屋は建物の奥まったところにあり、その前で大葉ちゃんから鍵を受け取ってドアを開けた。
中はごく普通のホテルの一室のような感じだ。ただし、ヒトイヌ拘束を施していることが前提だからか、床には柔らかな絨毯が敷かれており、ベッドも低く、深く沈みこまない反発力があるマットが使用されている。
「大葉ちゃん、ちょっと待っていてね」
私は大葉ちゃんにそう言っておき、着ている服を脱いでいく。これからヒトイヌ拘束状態の大葉ちゃんと本気で愛し合うなら、汚れないように服を脱ぐのは当たり前だ。
けれど、大葉ちゃんは私の言葉を無視して、足下に纏わり付いてじゃれてくる。
本物の犬みたいな大葉ちゃんに私は苦笑しつつ、膝を突いて大葉ちゃんの前に手を翳した。
「待て。待て、よ。大葉ちゃん」
「きゅーん……」
情けない声をあげつつ、大葉ちゃんは素直に静止する。これも一種のプレイ。『待て』を言われたいがための行動だった。
そんな大葉ちゃんの行動がいちいち可愛く思えてしまう私は、大葉ちゃんにすっかり骨抜きにされてしまっているのだろう。全然悪い気分ではないから問題ないけど。
服を脱いできちんとハンガーに掛け、全裸になってベッド代わりのマットに腰を降ろす。
「お待たせ。大葉ちゃん、おいで？」
「わんわんっ！」
飛び付いてくる大葉ちゃんを受け止め、ぎゅっと抱きしめる。ラバースーツ越しではあったけど、大葉ちゃんの体温が素肌でしっかり感じられてとても気持ちよかった。
私は大葉ちゃんと目を合わせ、瞼を閉じるのを待ってからその軟らかそうな唇に唇を合わせた。
彼女のふっくらと柔らかな唇はとても気持ちよく、愛しさがこみ上げてくる。
舌を伸ばして彼女の中に入り込んだ。大葉ちゃんも大人しく口を開いて私を受け入れてくれる。熱い体液が交換さ

れ、痺れるような快感が触れた場所から生じていた。
さらに大葉ちゃんを感じるべく、私は彼女のうなじあたりに手を添えて、逃げられないようにしてから舌をさらに奥へと進める。大葉ちゃんは私の勢いに怯みながらも、おずおずという表現が似合う動きで舌を伸ばしてくれた。
舌と舌が絡み合い、熱の交換が行われる。激しい舌での愛撫によって呼吸もままならず、お互いに荒い呼吸を交わした。至近距離で目と目が合い、絡んだ舌と同じくらい視線が熱く絡んだ。
「……うふっ」
私は一端大葉ちゃんから口を離す。大葉ちゃんとの間に唾液の糸が引いて、私の胸の上におちた。
大葉ちゃんは離れてしまったことに残念そうな顔をしていたけど、まだまだここから。
私は大葉ちゃんの体勢を反転させ、私の膝の上に載せた大葉ちゃんを後ろから抱きしめるような形に変える。
顎を取って真横を向かせ、彼女の肩越しにもう一度ディープキスを行う。そしてそのまま、彼女を抱きしめていた両手を使ってその身体を弄り始める。
「ふっ……っ！」
私の腕の中で大葉ちゃんが身体を震わせる。短くなった手足をばたつかせ、与えられる快感に耐えようとはしているみたいだったけど、儚い抵抗にしかならない。
大葉ちゃんの程よく膨らんだ胸を右手で揉み、ラバーストップ越しに感じる頂点の突起を指先で軽く刺激する。身体をくねらせて大葉ちゃんが悶えるけど、その動きもまた私の興奮を高める材料にしかならなかった。
空いた左手で大葉ちゃんの大きく開いた足の間、股間のジッパーを引き下げる。まだヒトイヌ拘束を施されてそんなに時間は経っていないだろうに、彼女のそこは十分な湿度と熱を有していた。それどころか、重力に従ってとろりとしたものが奥からどんどん垂れてくる。
私は口を離して、大葉ちゃんに笑いかける。
「すっかりいい気持ちみたいね。ほら、もう私の手に垂れるくらい濡れてる……」
糸を引く指先を大葉ちゃんに見せ付ける。羞恥心を煽られて大葉ちゃんは真っ赤になった。顔を背けようとするので、その口に彼女の愛液がかかった指先を突っ込む。
「むーっ！」
指先で大葉ちゃんの口内を刺激し、愛液と唾液とを絡ませる。
「ふふふ、自分で出した蜜のお味はどう？　私にも味見させて？」
大葉ちゃんの顎を捕まえ、横を向けて口を合わせる。愛液の影響なのか、少し味が変わったような気がした。実際は指先についた愛液の量なんて微々たるものだし、そんな大きな変化でもないのだろうけど、大葉ちゃんのものを一緒に味わっているという興奮が大事だ。



唇から前歯の一本一本に至るまで、しっかりと味合わせてもらった。
キスを中断し、荒い呼吸を繰り返す大葉ちゃんを一端休ませる。その間に私は腕を伸ばして、ベッド脇のサイドボードから道具を取り出してベッドの上に並べる。
まずはその道具の中のひとつ、ローションのボトルを取って、片手で蓋を外した。
そして、大葉ちゃんの顎に手を添え、私に身体を預けてもたれかかるように仰け反らせる。
無防備に晒された喉と肋骨の間のくぼみに、ローションを垂らす。そのローションが流れていく感覚に、大葉ちゃんの身体が震えるのが体重を預けてもらっている私に伝わってくる。一端ボトルを置き、ローションを追いかけるように、手を動かすと、ラバースーツの上を滑る手の動きが滑らかになって、独特の感触が掌に伝わってきた。
ローションを引き延ばしつつ、大葉ちゃんの乳房を揉んでいく。ローションで濡れたラバースーツは光沢を放ち、そのスーツに包まれた大葉ちゃんの身体をよりエッチに彩っていく。感じていることを示すように、触れたところから非常に熱い体温を感じた。
スーツの中に熱が籠もりつつあるのだ。大葉ちゃん本人にしてみれば、さぞや熱に浮かされたような感覚になっているだろう。
「うふふ……もっと感じていいのよ。ここなら私以外誰も見てないから」
大葉ちゃんを両腕で抱きしめながら、再度ローションの瓶を取り、右手にそのローションをたっぷりまぶす。どろどろになった手を、大葉ちゃんの股間に押し当てた。
「っひゃう、ッん！」
腰が跳ねて逃げようとしても、私の腕の中からは逃れられない。私は大葉ちゃんの中に指を徐々に沈めていった。
その場所はマグマのように熱く蕩け、私の指を際限なく飲み込んでいくような感じがした。
秘部に対する刺激だけでイキすぎて気絶した私がいうのもなんなのだけど、大葉ちゃんのここも感じやすくて名器と称して間違いないと思う。私の入れた指を時に強く、時に緩やかに締め付け、奥へ奥へと導こうとしている。
あまり奥に入れすぎるのは良くないのだけど、十分以上に均しておかないと痛い思いをするのは大葉ちゃんだ。だから私は中指と薬指を二本揃えて、第二関節くらいまで入れて大葉ちゃんの中を弄る。
「ウゥー、アウゥッ！」
感じすぎているゆえか、大葉ちゃんは言葉を封じられているわけでもないのに、もう意味を成す言葉を言うことも出来ていなかった。ひたすら悶え、呻き、身体を震わせて感じている。
そんな大葉ちゃんの感じている様子を見ていたら、私の方まで本格的に身体の奥が熱くなって来てしまった。

大葉ちゃんが動く度に大葉ちゃんの着ているラバースーツと、私の胸が擦れて、それも感じる一因になっていた。
私は自分の理性を保ちつつ、もう垂れているのがローションなのか愛液なのかわからなくなるくらいまで大葉ちゃんのそこを揉みほぐした。声も出ない様子で口を開け閉めし、痙攣している大葉ちゃん。
準備は十分に整った。
「大葉ちゃん、四つん這いになって」
私は大葉ちゃんに呼びかけて命じ、床に四つん這いの姿勢を取らせる。大葉ちゃんは全身を震わせながらだったけど、なんとか肘と膝の四点で身体を支えていた。
そんな大葉ちゃんをこれ以上待たせないように、私は急いで貞操帯型のベルトを腰に巻く。厳密にはこれは貞操帯ではなく、股に通しているベルトの秘部に接する部分には穴があった。けど、それでいいのだ。
私は双頭バイブを手にとり、ローションと愛液まみれの大葉ちゃんの股間にそれを擦りつける。
そして十分に潤滑油をまぶしたところで、濡らした方をベルトの穴を通して自分の中に入れた。半分ほど入れればいい、と言っても双頭バイブはそれなりに大きなものなので結構苦しい。幸い、大葉ちゃんとの絡みのおかげで十分以上に準備の整っていた私の穴は、双頭バイブを半分近く受け入れてくれた。
その状態で、股を通したベルトを弄り、双頭バイブをその状態で固定する。そうすると、まるで私の股間から殿方のものが生えたような状態になった。双頭バイブは軟らかい素材で出来ているから、ちょっと上を向けるような形で曲げれば、かなりそれに近くなったと思う。
私は四つん這いで待っていてくれた大葉ちゃんの背後に膝を突き、その可愛らしいお尻を両手で掴んだ。
「お待たせ、大葉ちゃん……さあ、深く繋がりましょう……？」
大葉ちゃんのそこに合わせ、双頭バイブの尖端を擦りつける。あっという間に大葉ちゃん側の先端もドロドロとした液体に濡れた。
その時、大葉ちゃんが情欲に溺れ、涙に潤んだ視線を肩越しに私に向ける。
「幸さん……はやく……きて……」
それは本来のヒトイヌプレイ中のルールから逸脱した行為。ヒトイヌを演じ、甘えるのが上手な大葉ちゃんは目や仕草だけでその意思を伝えられる。
そんな大葉ちゃんが思わず零した、弱々しく私を求める言葉。
私の頭の冷静な部分を吹っ飛ばすくらいの衝撃があったのは言うまでも無い。
そこからはまさに獣の饗宴であったと、あとから思い返すことしかできない。
ずぶり、と大葉ちゃんの中に私の中から飛び出す物の先

端が入り込んだ。
私も彼女も、許容量を超えた快楽に溺れ、そして何度も一緒に絶頂したことは覚えている。
気づいた時には、私はヒトイヌ状態の彼女を抱きしめたままベッドに寝転んでいて、彼女も私に擦り寄ってくれていた。

そうしてまた一段と仲良くなった私たちは、ヒトイヌ公園をあとにして、住む街への帰路を進んでいた。
大葉ちゃんはシートに座るなり、船を漕ぎ始め、いまでは私の肩に頭を乗せてすやすやと眠っている。疲れたのだろう。無茶をさせてしまったかもしれない。私とて、ヒトイヌ状態で走り回って疲れ果てていた。
それでも私が大葉ちゃんのように眠りに落ちずに意識を保っていられたのは、哀しいかな、仕事で限界を超えたデスマーチには慣れているからだろう。
意識を保つ術は知っているのだ。疲れを自覚して身体全体が重いけども。まだこういった無茶が利く年齢であることに感謝するしかない。
疲れを差し引いても、私はとても満足した気分だった。
大葉ちゃんという最高のパートナーと一日中大好きなヒトイヌプレイに興じていたのだから、不満などあるわけがない。
次に来る時はもっと色んなこともしたいなと思いつつ、大葉ちゃんという最高のパートナーに出会えた奇跡に――それをもたらしたヒトイヌ公園という場所に――感謝していた。

ヒトイヌ公園　ふたりの場合　おわり

ヒトイヌ公園　のら？の場合

『寝ているだけで日給３万円！』

そんな勧誘広告が家のポストに入っていたとして、あなたならどうするだろうか。

あたしは詐欺を疑いつつも、その魅力に抗うことが出来ず、募集先に連絡を取ってみた。そして、色々と電話面談と書類選考を経た上で、とある病院にたどり着いていた。

仕事内容はいわゆる治験、というものらしい。割のいいバイトとして、大学の友達にも受けている人がいるらしいし、最初の勧誘広告で抱いた怪しさに比べ、割としっかりとしたバイトではあるみたいだった。

「いらっしゃい。鈴木さんですね。それでは本日服用していただく薬についてですが……」

女性の医者が色々丁寧に説明してくれたけど、正直ちんぷんかんぷんで、半ば以上聞き流していた。

「服用すると強い眠気を感じてほとんど起きていられないと思います。部屋のベッドに寝転がっていてくだされば大丈夫ですので」

「はあ……わかりました」

「時折検査のために部屋に人が入りますが、すべて女性スタッフですのでご安心ください」

前後不覚になっているところを襲われでもしたら大変なので、その配慮は当然だろう。

「何かご質問はありますか？」

「いえ、特には……あ、そうだ。明日の夜までの予定ですけど、食事とかお風呂とかは？」

「必要があれば内線を使って申請してください。おそらくほぼ寝て過ごすことになりますので、必要にならないと思いますが。最低限の水分や栄養補給は点滴で行いますのでご心配なく」

本当にそれで大丈夫なのか、ちょっと不安に思わなくもなかったけど、困ってからでいいかと納得した。

ダイエットみたいなものだと思えば、一日程度の絶食は慣れているし。

そして部屋に案内されて、渡された院内着に着替えて、薬を飲み、脳波とかを調べるのか、色々身体に器具を貼り付けられて、寝転がったベッドの上で眠気を感じたかと思ったら――

「お疲れ様でした。今回の実験は終わりです」

ベッドの上で眼が覚めて、そう医者に言われた。

気づけば明るかったはずの窓の外の景色は、暗くて夜の気配が漂っている。

「……はえ？　もう終わりですか？」

「はい。ばっちりデータも取れましたので」

「……えーと、何も覚えてないんですけど」

「事前に説明した通りです。そういう薬で、そういう実験

ですから問題ありません」
「……はぁ。そう、ですか」
問題ないのだろうか。そうなのだろうか。
不思議には思ったけど、無事終わったのならそれでいいかと割り切った。二日間寝ていただけで六万円ももらえるのだから、ありがたいといえばとてもありがたい。
「ところで、もし鈴木さんがよろしければ、今後も定期的に実験を受けるつもりはありませんか？」
「……え？　一回だけの募集だったんじゃ？」
「はい。普通はそうですが、鈴木さんは体質的にこの実験に向いているようですので、出来れば今後も定期的に受けていただきたいのです。無理にとはいいませんが、継続となればそれなりに日給の増額も……」
「やります！」
正直、ものすごく怪しいんじゃないかという気がしないではなかった。
けど、こんなたやすいことで何万も稼げるのなら、思わず食いつくのも仕方ないと思う。しばらく土日が潰れるから友達と遊べなさそうだけど、十分稼いでから遊んだ方が色々遊びやすいし。
女医さんは笑顔を浮かべると、継続するための手続きの話を進めてくれた。
「そういえば……聞き忘れていましたが、身体に違和感はありませんか？」
「身体に……？　いえ、特には……あの、もしかして何かあるんですか？」
言われて身体を触ってみるけど、特に痛みがあるとか、だるいとかそういうことはない。ずっと寝ていたら普通はどこか痛んだりするものだけど、そういうこともない。
「最初にご説明したとおり、今回の実験では長時間寝たきりでも問題が無いことが目的のひとつですので。実験の成果を確認しただけですよ？」
そういえばそんなこともいっていたような。
あまり下手なことを言って今後のバイトを首になっても嫌だし、黙っていた方がよさそうだ。そう考えてそれ以上の追求を止めた。
寝ていただけにしては過剰すぎるほどの報酬が何を示しているのか、あたしは理解していなかった。

少し時間は巻き戻る。
被検体の彼女に薬が投与されてから数十分後、彼女はベッドに寝転んで微睡み始めた。
彼女の身体には検査用にデータを取るためと称し、脳波

などを検知する機械が取り付けられている。それらの機械は彼女の意識が深く沈んで行っていることを示していた。
やがて彼女が完全に昏睡状態に陥った頃、部屋の扉を開け、女性スタッフたちが入室する。
念のため、彼女が起きないことを直接確認した後、スタッフたちは彼女から検知器を外し、院内着を手早く脱がし始めた。下着姿にしたかと思えば、そのままその下着も脱がし、まとめて丁重に籠にしまってしまう。
全裸にされた彼女だが起きる気配はなく、すやすやと眠り続けていた。
そこに、ひとりの女性スタッフが大きなスーツケースを持ってくる。大きめのキャスターのついたそのケースの蓋が床の上で開かれると、その中は空っぽだった。区切りや荷物を固定するベルトすらない。
女性スタッフたちが協力して、裸の彼女を抱え上げ、スーツケースの中にその身体を収めていく。窮屈な体勢ではあったが、彼女の身体はケースの中にきっちり収まった。静かな寝息を立てていて、起きる気配は全くない。
髪や身体を挟まないように注意しつつ、スーツケースの蓋が閉められる。かすかな抵抗感を伴いつつも、蓋はしっかり閉められた。
ふたりがかりでスーツケースを起こし、キャスターで転がして移動が始まる。
こうして、被験者の彼女は本人も知らぬまま、病院から連れ出されたのだった。

とある施設の一室に、スーツケースが運び込まれる。
「お疲れ様ですー。素体、到着しましたー」
女性スタッフがそう呼びかけると、部屋の隅で道具を弄っていた男性職員が立ち上がる。
「おー。待っていたぞ、ご苦労さん」
「一応素体のデータはこちらです。簡単に眼を通しておいてくださいね」
「オッケー。あとはこっちで処理しとくから」
スーツケースと資料を受け取り、男性職員は軽く資料に眼を通す。お目当ては身体的特徴の欄だ。持病や肉体的な不調が無いかの確認が目的だった。
それによると、彼女は身体的に健康であり、肉体的にも一般女性程度の柔軟性、筋肉量を有しているようだった。身体的な各種サイズにも眼を通す。
「Dカップか……まあ、ほどよく大きくていい感じかな」
身体的な情報の確認ついでに、年齢や所属などの個人情報やバイトの志望動機の欄にも眼を通す。
「ふむ……大学生か。お金に困っているという風じゃないし、わざわざこんな怪しげなバイトに来なくてもなぁ……いつか酷い目に遭うぞ」
今行われていることは全力で棚にあげながら、男は彼女

を心配する。
　ぶつぶつ言いつつ、男性職員は資料を机の上に放り出して、内線を使って他のスタッフを呼び出す。ほどなくして数人のスタッフが部屋に入ってきた。
「よし、さっそく始めるぞ。手伝ってくれ」
　そういって男性職員はスーツケースをスタッフと協力して持ち上げ、部屋の中央にある作業台の上で蓋を開いた。
　薬の影響で穏やかに眠り続ける被験者の裸の女性が晒される。
　スーツケースの中から女性が引き出され、作業台の上に仰向けに寝かされた。作業服に身を包んだ男性たちに、裸で眠る女性が囲まれている。
　完全に事案ものの光景だが、彼らに必要以上に下卑た表情を浮かべたものはいなかった。
　しかし相応に女体に興味はあるのか、目の前で無防備に眠る彼女をじろじろと眺める。
「結構良い身体してるッスね。ちょっとぽっちゃりしているッスけど」
　一番若いスタッフがそう軽口を叩くと、中年くらいの男性がそれに応じた。
「馬鹿野郎。これくらいがいいんだろうが。俺は最近のガリガリしたモデル体型は好かん」
「胸と尻がデカいから、仕上がった後の見た目はよくなりそうですけどね」
「顔はまあ人並みだが、どうせ見えなくなるしなぁ」
　普通は同性か特別な者にしか見せないであろう素裸を、見ず知らずの異性たちに無遠慮に評価されているとも知らず、被験者の彼女はすやすやと眠り続けていた。
　好き勝手に騒ぐ男性スタッフたちに対し、男性職員はぽんぽんと手を打って注目を引く。
「ほいほい、無駄口を叩くなー。万が一眼が覚めたら面倒だ。さっさと済ませちまうぞ」
　その男性職員の指示に従い、スタッフたちは一斉に作業に取りかかり始めた。部屋に備え付けられた棚から、様々な道具が取り出されて作業台の上に並べられていく。
　大型犬用と思われる無骨な首輪、全身を覆う黒いラバースーツ、柔らかなクッションが内側にあてがわれた肘当てと膝当て、ふさふさした尻尾飾りがついたアナルプラグ、薄い金属で作られた貞操帯、さらに多数のベルト、さらに目隠しと開口具。
　人を拘束するために作られた道具が並んでいた。
　その中から、男性職員はラバースーツを手に取る。同時にスタッフたちはゴム手袋を身につけ、どろりとした粘性のある液体を被験者の女性の身体にすり込んでいく。
　液体によって白い裸身がてらてらと光り、煽情的な光景になっていた。
　そんな光景を前にしても、スタッフたちは黙々と作業を続ける。



腕や足だけでなく、お腹、背中、股間、胸の間など、スタッフたちは丹念に液体を塗り込んでいった。もし女性に意識があれば凄まじい羞恥に晒されていただろうが、穏やかに眠る彼女は何の反応も見せない。

「終わりました」

「よし、じゃあ着せていこう」

スタッフの言葉を受け、男性職員が指示を出し、ラバースーツの中に女性の身体を収めて行く。

ラバーの抵抗はあったが、塗り込んだ液体が潤滑油の役割を果たして、さほど苦労することなく女性の身体はラバースーツに覆われた。

背中側のジッパーをうなじの下まで引き上げると、彼女の身体にぴっちりとラバーが吸い付き、その身体のラインを露わにした。そのラバースーツの手の部分は少し特殊な形状をしていて、丸めた拳をそのまま収めるような形状になっていた。このスーツを着せられた人間は、手先を用いた作業が出来ないようにされているのだ。

スタッフたちはスーツに緩みがないように、彼女の身体を掌で擦り、スーツを身体に馴染ませる。そうこうしている間に、スーツがぴちぴちという音を立てながら、彼女の身体にさらにフィットしていった。

「それにしても、すごい技術っすよねこれ……」

若いスタッフが呟くのに、同意するように他のスタッフも頷く。

「体温によって伸縮するっていう理屈はわかるけど、サイズ合わせ不要ってんだからな」

「一体一体オーダーメイドで作るよりは、まあ安いんだろうけどなー」

「どんな素材を使えばそんなもんが出来るんだか……」

ラバースーツが彼女のサイズに馴染む頃、彼らは次の作業に映った。

首輪を彼女の首に巻き付け、しっかりと固定する。首輪は一見普通の犬の首輪のように見えたが、ラバースーツと一体化するような構造になっており、首輪を外さない限りラバースーツは脱げないようになった。

もっとも、仮に彼女自身が脱ごうとしても、そもそも手が使えないために脱げはしないのだが。

ラバースーツにほぼ全身を覆われた彼女だったが、ラバースーツには顔以外にも覆っていない箇所があった。スタッフたちが仰向けに寝ている彼女を俯せにひっくり返し、膝を立てさせてお尻を突き出させると、その穴が明らかになった。

彼女の肛門がある位置に、絶妙な穴が空いている。ラバースーツはぴっちりと彼女の身体を覆っているため、肛門だけが露わになっており、かなり卑猥な状態である。

その肛門に、スタッフのひとりが先ほどの液体をまぶした指先を突き入れる。液体のぬめりに加え、意識のない彼女のそこには力が入っておらず、あっさりと指を中に受け

入れた。受け入れる瞬間は反射的に緊張しかけたが、すぐに力が抜けて指が奥に入るようになった。

肛門を軽く解すようにスタッフの指が動く。液体を馴染ませつつ、確認も兼ねていた。

「うん、大丈夫そうだな」

その場所に大便が溜まっていないことを確認したのち、尻尾飾り付きのアナルプラグを手に取る。プラグにも液体を馴染ませた後、こともなげに肛門にそれを差し入れた。

プラグがぬぷり、とその穴を埋めてしまう。そして、尻尾飾りの根元を捻ると、仕掛けが動く音がして、手を離してもプラグが抜けなくなった。体内でプラグが膨らみ、括約筋を挟む込むようにして抜けなくなったのだ。

スタッフが離れると、突き出されたお尻から飛び出した尻尾飾りがぴくりと動く。誰も触れていないのに動いているのは、プラグに仕掛けがある。括約筋でプラグを締め付けると、その強弱によって尻尾飾りが動くようになっているのだ。自分の意思でこのプラグを身につけている者の中には、尻尾で感情表現が出来るほどに細かく動かせるというのだから、良く出来た仕掛けである。

意識のない彼女ではそこまで細かい動きはできないだろうが、左右に揺れるだけでも十分だった。

さらに、その尻尾を通すことの出来る、穴の空いた貞操帯が装着された。尻尾飾りは通すが、プラグの部分は通れない程度の穴しか開いていないため、貞操帯を外さなければそれを取り外すこともできなくなった。

そしていよいよ、作業は佳境に入っていく。

再度仰向けに被験者の彼女を寝かせ、いよいよ本命の拘束に取りかかる。

彼女の四肢を曲げさせ、膝と肘のあたりにクッションがついた革の袋を被せ、折り曲げた状態で手足を固定する。袋の口はベルトで絞められるようになっていた。そのベルトを締め、背中側に伸びたベルト同士を連結してしまえば、特殊な工具を用いない限りそれは取り外せなくなる。

手足が伸ばせず、半分になってしまった彼女は、のびたカエルのようなあられも無い格好で作業台の上で身体を開いていた。彼女の大きめの乳房はラバーにぴっちりと覆われており、そのラバーが良い具合にテンションを保っているのか、重力に逆らってその柔らかそうなお椀型の形を保っていた。彼女の呼吸に伴って揺れるため、思わず触りたくなる動きを見せている。

スタッフが女性の全身を拘束している間に、男性職員は女性の髪をまとめ、邪魔にならないように水泳のキャップのようなものを被せる。あごの下、耳たぶ、額、瞼などには細かい毛をしたハケを使って身体に塗っているのと同じ液体を丁寧に塗っていく。

そして、最後の仕上げに頭全体を覆うラバーマスクが用意された。それは革で出来た無骨なフォルムをしており、眼にあたる部分はメッシュ加工されていて一応見えるよう

になっているものの、相当視界に制限が加わることは想像に難くない。頭の部分には三角形の犬耳のような形の飾りのようなものがあり、大まかなフォルムだけをみれば犬のように見えるだろう。口元を覆うマスクの部分は外から見れば犬の上あごと下あごのように見える。少し前方に向けて張り出しており、フォルムは犬に近付いている。

マスクには下顎と上顎に分かれるギミックが施されていて、下顎の方には舌を抑えるように突起が内側に向けて突き出していた。

「口を開いてくれ」

男性職員がそうスタッフに指示を出し、彼女の口を開かせる。そこにマスクの下顎部分をはめ込むようにしながら、全頭マスクを彼女に被せた。マスクの縁に当たる部分はきっちり首輪と接するように収まり、肌の見えている部分はマスクの口部分を開いた時に見える頬の辺りだけとなった。

そして、全身を黒いラバーに覆われたヒトイヌがそこに完成する。

だがそこに動こうという意思はなく、ただ寝ているだけだ。この形を作るだけなら、ただのマネキンか人形でも用意すればいい。その方がコストもかからないだろう。

それをわざわざ本物の女性を半ば騙して連れてきて、この衣装を着せたのには、本物の人間がその中に入っているという条件が必要だからである。

スタッフたちが見守る中、男性職員が部屋の隅に置かれたパソコンを操作した。

その操作に伴い、それまでずっと脱力して為すがままになっていた彼女がぴくりと動いた。まるで浜に打ち上げられた魚のように、連続して小さく跳ねる。とはいえ、四肢が拘束されている現状、それ以上の動きは無い。

だが、その動きが見られれば十分なようだった。男性職員はその結果に満足したかのように頷き、スタッフたちに次の指示を出す。

「……よし、四つん這いにしてやってくれ」

スタッフたちが総出で彼女の身体を持ち上げ、仰向けの状態から俯せに、肘と膝で身体を支える四つん這いの体勢に持って行く。

すると、いままで脱力してされるがままだった彼女が、四つん這いでバランスを取って倒れないように動いた。スタッフたちがゆっくり手を離すと、彼女は少しふらつきつつも、四つん這いのまま止まる。

だが彼女が眼を覚ました様子はない。脱力した口元は開いたままで、そこからどろりとした唾液が零れ落ちるが、気にした様子もなく、垂れ流している。

「おっと、口を閉めさせるのを忘れていたか」

男性職員がそう言って再度パソコンを操作すると、彼女の口がマスクごと閉められた。マスクは彼女の下あごの動きに連動して動くようになっており、彼女が口を開けよう

とすれば開くし、閉めようとすれば同様に閉まる。
「ふたつの装置はどちらもちゃんと動いているようだな」
男性職員のいうふたつの『装置』とは、ひとつは彼女の口を覆い、上下の顎として開閉するギミックがついたマスクのこと。
そしてもうひとつは、彼女の身体を男性職員の意のままに動かしている装置のことだ。
実は全頭マスクの犬耳の部分には、人間の脳の代わりに運動神経に指令を出すことの出来る装置が取り付けられていた。予め特殊な薬品を飲ませた者にしか利かないが、本人が昏睡状態で意思がないままでも、自在にその身体を動かすことが出来るのだ。
これを用いて、この施設では素養のない者もヒトイヌという存在に仕立てあげていた。

その施設は、ヒトイヌ公園と呼ばれている。
拘束プレイが趣味な者の中でも、ヒトイヌプレイの愛好家が集う場所だ。
広大な敷地と設備を有し、その中では自由にヒトイヌプレイを楽しむことが出来る夢のような場所。
ここではフリー・カップル問わず、様々なヒトイヌ愛好家が日々プレイを楽しんでいる。
コアな会員が多く、リピーターも多い公園ではあるが、いかに全国各地から同好の士が集まるとはいえ、会員数は決して多いわけではない。
敷地が広いことは魅力ではあるが、同時に会員だけでは閑散とした雰囲気になるのも事実だった。
ヒトイヌ拘束は行わず、見学だけに訪れる会員も多いため、公園内には常にそれなりの数のヒトイヌがいることが望ましい。
しかしヒトイヌになりたがる会員は常駐しているわけではない。それぞれに生活があるのだから当然だ。
そこで、いわゆるサクラの一種として導入されているのが『野良のヒトイヌ』である。
主人を持たず、出会った会員が好きに触れて良いヒトイヌ。見学希望の会員がヒトイヌとの触れあいを楽しむための存在である。
仕事として、自発的に『野良のヒトイヌ』となっている公園側の従業員もいるが、ヒトイヌになるということに抵抗のない者は少ない。
そこで行われているのが、薬によって休眠状態にした被験者を、寝ている間ヒトイヌに仕立て上げてしまう試みだった。意識がない者の身体を自在に動かすというのは、難しいことではあったが、それを可能にする技術力がこの施設にはあった。
これにより、そういったプレイの素養が無い者も『野良のヒトイヌ』として動員できるようになっていた。

こういった『野良のヒトイヌ』の存在が呼び水となり、見学希望のみの会員も増えたし、『自分もやってみよう』と考えてヒトイヌ体験に踏み切る者も増えている。
この方式なら本人は意思を失っていても構わないということで、素養はなくとも『野良のヒトイヌ』の仕事として動員できる従業員も増えた。
常に一定数の『野良のヒトイヌ』を確保するのは様々な困難の伴うことであったが、その甲斐はあるのだ。
そして今日、また一匹、新しい『野良のヒトイヌ』が公園内に放たれたのだ。

新しい被検体をヒトイヌに仕立て上げる作業を終えた男性職員は、パソコンの画面を見つめていた。そこに、両手にコーヒーを持ったスタッフがやってくる。
「お疲れ様です。コーヒーが入りましたよ」
「おお、ありがとう」
軽く礼を言いながら受け取る男性職員。コーヒーをすすりつつも、その視線は画面から離さなかった。
スタッフがその画面を覗き込む。
「さっきの子ですか？　なんだか、危なっかしいですね」
パソコンの画面には芝生の上を歩く黒いヒトイヌが映っている。当然四つん這いで歩いているのだが、ぎこちない動きだった。いまにも転びそうだ。
万が一転んだとしても、公園内の芝生エリアは非常に柔らかいため、滅多に怪我はしないのだが。
「そうだな。もう少し馴染めばぎこちなさも消えるはずなんだが……それまでは眼を離さない方がよさそうでな」
「ですねぇ。怪我させたら大変……おや、このままだと別のヒトイヌと接触しそうですよ」
俯瞰した映像で、歩いて行く野良のヒトイヌの進行方向から、別のヒトイヌが歩いて来ているのが見えた。そちらは比較的軽快な足取りで移動している。
「むぅ。馴染んでないうちから他と接触させるのは避けるべきだが……」
「でも、こっちは野良じゃなくて純粋な会員さんですね。あ、野良に気づいて近付いてきちゃっていますよ」
「……念のため、いつでも手動に切り替えられるように準備しておくか」
遠隔操作もできなくは無いが、可能な限りやらないのが施設の方針だった。無論、安全などに支障が出る場合はその限りではないが。
ふたりが見守る中、野良のヒトイヌと会員のヒトイヌが接触しようとしていた。

ヒトイヌ公園の常連であるヒトミは、その日もフリーで公園に遊びに来ていた。

女性の単独入場は施設的にも歓迎されているらしく、他の遊び場で遊ぶより遙かに安く、遙かに刺激的な体験が出来るというのが、ヒトミがこの公園によく遊びに来る理由である。

普段は隠している性癖を思う存分に露わに出来る場所として、彼女のストレス解消に役立っているのだった。ここに通うようになってから、態度から角が取れたと周りの評判もいい。何をしているかは誰にも話せていないが。

ともあれ、煩わしい現実から解放された彼女は、いつも通りヒトイヌの衣装に身を包んで公園内を闊歩している。

普通ならば不格好に歩くことしか出来ない四つん這いでの歩行にも、ヒトミは慣れたものだった。軽快に手足を動かし、公園を自在に動き回っている。

ヒトミが好んで身につけるヒトイヌの衣装は、全身を覆うラバースーツに、四肢を折り曲げての拘束。ヘッドセットと一体化した犬耳。

それに、顔の上半分を覆うアイマスク。このアイマスクにはほどよく視界が確保される程度の小さな穴がいくつも開けられており、外から顔は見えなくても内側からは一応視界が確保できるようになっている。

良く他のヒトイヌが着けている口枷やマスクは付けていない。理由は単純で、ヒトミは息苦しいのが苦手だからである。

股間の部分には後ろの穴に尻尾飾りの付いたアナルプラグを差し、括約筋の収縮に伴ってフリフリと尻尾を揺らしていた。前の穴には尻尾と連動し、振れば振るほど震えるバイブが埋め込まれていて、ひとりでも楽しめるようになっていた。

ヒトミのそこそこ大きな胸の頂点には、パッド型の震動機が仕込まれており、これも肛門のアナルプラグに連動して震えるようになっていた。

現在もヒトミは歩きながらお尻の穴を締めたり緩めたりして、尻尾を軽快に左右に揺らし、それによって膣内と乳首に震動を与え、外を歩きながらにして強い快感を味わっている。

そうやって散歩しながら快感を貪るのが、ヒトミがこの公園でよくやる楽しみ方のひとつだ。

（んー、今日はどこに行こうかなぁ。アトラクションハウスはこの前行ったし……他の子とじゃれ合いたいし、休憩所に行こうかな）

ヒトイヌになろうという会員は、大抵マスクなどで顔を隠し、言葉も使えないため、公園内で出会ったヒトイヌと外で会うということは滅多に無い。

無論、その気になればここでのプレイが終わってから連絡を取り合うこともできるのだが、ヒトミ自身がそうであるように、ヒトイヌになりたい会員はヒトイヌの時とリアルの時は分けたいと考えている者が多い。

ゆえに基本的にヒトイヌ同士の出会いは一期一会。

それゆえに気兼ねせず、気楽にじゃれ合うことができるという利点もあった。

（ひとりでも楽しめることは楽しめるけど……やっぱり人といじりあった方が気持ちいいしね……っと）

休憩所目指して歩いていたヒトミは、前方の芝生エリアでふらふら歩いているヒトイヌを見つけた。どうも動きがぎこちない。

（あのふらつきよう……コイヌさんかな？　よーし、ここはヒトイヌの先輩として、思いっきり気持ちよくしてあげちゃおう！）

年齢・性別を問わず、まだヒトイヌ経験が乏しい者のことを、この公園では『コイヌ』と呼ぶ。誰が言い出したのかは不明だが、ヒトミもその慣習に倣っていた。

近付こうとしたヒトミは、その途中で公園の規約を思い出し、相手のヒトイヌの首輪にタグがぶら下がっていないかを確認した。

会員によっては他のヒトイヌとの接触を嫌う者もいる。そういう場合、首輪のところに赤いタグが付けられているのだ。そういった相手に対し、見かけたりすれ違ったりする程度なら問題ないが、無理矢理じゃれ合おうとすれば施設側から警告され、ペナルティが課せられてしまう。

以前タグに気づかずにじゃれ合いに行って、痛い目を見た覚えのあるヒトミはそれをちゃんと学習していた。

（あのときはしんどかったなぁ……）

ヒトイヌ公園におけるペナルティは罰金刑ではない。文字通り、身体で支払うことになる。

接触厳禁のヒトイヌに絡みに行ってしまったヒトミは、施設側の警告もあってすぐ謝罪しながら離れたが、相手のヒトイヌは一目散に逃げていってしまった。

「ちゃんとご説明しましたよね？　他のヒトイヌに絡みに行くときはまずタグを確認してくださいと」

駆けつけた職員は怒ったような、困ったような、複雑な表情を浮かべて、ヒトミに説教をする。

「ごめんなさい……」

ついテンションがあがっての失態だったため、弁明の余地がない。ヒトミは項垂れて反省を示す。

職員は溜息を吐きつつ、ヒトミに対して厳しい口調で言った。

「規約違反にはペナルティが課せられることになります。拒否されるのであれば、今後一切の入園禁止ということになりますが、いかがなさいますか？」

入園禁止は、ヒトミにとって最悪のペナルティだ。

ペナルティの内容にもよるが、それは避けたいと彼女は考える。

「ペナルティって、どんなものになるんですか……？」

ある程度のことなら受け入れる気はあった。

「規約違反は初めてですし……貴女はヒトイヌ利用者ですからね。そう重いペナルティにはなりません。そうですね……『二日間の強制入園』くらいが妥当でしょうか。こちらが指定した日時に、こちらが指定したヒトイヌ拘束で、入園していただくという形になるかと。あ、長時間になりますが、ペナルティの際の利用料はいただきませんのでご安心ください」

最初そのペナルティを聴いた時、ヒトミはなんて軽いペナルティなのかと思った。

例えばこれが普段一般入場している人に課せられるペナルティであるならば、かなり厳しいペナルティと言えるだろう。

ヒトイヌを見るのは好きな人でも、自分にヒトイヌ拘束を施されるのはまた別だからだ。

しかしヒトミの場合、何度も利用するほどにヒトイヌ拘束には慣れていて、抵抗もない。

日時が指定されるのは痛いが、数日程度なら有給を取るなどしてなんとでもなるだろう。

（つまり……これはたぶん、ヒトイヌの数を制御するためのペナルティってことね。どうやって常に一定のヒトイヌの数を確保しているのか不思議だったけど……）

そういう形でヒトイヌの入園数を確保していたのだとすれば、むしろ納得が行く。

「わかりました！　そのペナルティ、謹んで受けます！」

このときのヒトミは「利用料を支払わないでヒトイヌ拘束してもらえるなんて、むしろラッキーじゃない？」とさえ思っていた。

日程はともかく、拘束の内容も施設側の要請に沿わなければならないということを失念していたのである。

後日、ヒトミは、がちがちに拘束されて、様々な責め具を併用された状態でヒトイヌにされた。

その上、『二日間』というのは日を跨ぐ形であった。

つまり、四十八時間近く、拘束され続けたのだ。

その結果、ヒトミはもう二度と公園の規約違反は犯さないと決意したのだった。

もうペナルティは受けたくないと、ヒトミはしっかり相手のヒトイヌを観察する。

（よし……タグはついてないから、大丈夫！）

接触しても大丈夫な相手だと見たヒトミは、相手の正面に回り込み、驚かさないように注意しながらゆっくりとその視界に入り込む。

彼女自身そうだからこそ、目まで覆うタイプの全頭マスクを着けていると視界が極端に悪いことを理解しているのだ。特に目の前にいる彼女のように、頭全体を覆う全頭マスクを被っている場合は、聴覚も制限を受けているので余計に他人の接近に気づきにくい。

そのヒトイヌもヒトミのことを見つけたのか、その顔がヒトミの方へと向いた。
「ウー」
挨拶のつもりで小さく唸りつつ、ヒトミはヒトイヌへと近付いた。
ヒトミは口元をマスクで覆っているわけではない。口枷も噛んでいないので、人間の言葉を喋ろうと思えば喋れる。
だが、ヒトイヌが人の言葉を喋って意思疎通するのはこの公園では推奨されていない。カップルなどが両方ヒトイヌになって入場する場合などはその限りではないのだが、フリーの者同士は仕草や簡単な鳴き声で意思疎通を図るのがこの公園のマナーだった。
ゆえにヒトミは挨拶のつもりで唸りながら近付いたのだが、それを受けたヒトイヌの反応はなんとも過敏なものだった。
思わず後退しようとしたのであろうそのヒトイヌは、場所が緩やかな斜面であることもあってか身体のバランスを崩し、仰向けにひっくり返ってしまったのだ。
（うわわっ、だ、大丈夫かな……）
結構な勢いで転んだように見え、ヒトミは思わず相手の心配をする。起き上がれないのか、手足をばたつかせてもがいていた。ラバースーツの助けもあって良い形を保っている胸が揺れている。
怪我はしていないことを確認し、ほっと息を吐いた。
（仕方ないなぁ。助けてあげよう。……あ、でもその前に、いいこと思いついちゃった）
ヒトミは仰向けに転がったままのヒトイヌを見て、いいことを思いつき、早速行動に移した。仰向けのヒトイヌに近付くと、組み敷くようにのしかかる。
ヒトミの胸と、相手のヒトイヌの形のいい大きな乳房とが触れあい、その弾力を持って互いの乳房を潰し合った。ラバーとラバーが擦れ合う感触が心地よい。
そして、ヒトミは肛門に力を入れ、尻尾を力強く振る。その尻尾の動きに連動して、胸のパッドに仕込まれたローターが震動し始めた。
ローターの震動がラバー越しに伝わったのか、ヒトミが組み敷いたヒトイヌはうめき声を大きくし、ヒトミの下でもがいていた。
（ふふふ……一緒に気持ちよくなろーね）
短い手足をばたつかせてもがくヒトイヌを可愛らしく思いつつ、ヒトミはその股間をヒトイヌの股間に合わせる。そうすると、熱い感触がラバー越しにも伝わってくるようだった。
（なんだ、あなたもすごく興奮してるんじゃない）
貝合わせなど、普段のヒトミにはやる機会もないことだったが、手足の自由が利きにくいこの公園内では定番のプレイのひとつだ。ゆえにどんな風に身体を捻ってあてがえ

ばお互いに気持ちいいかはよく理解していた。
　ヒトミの巧みな体重移動と体勢の誘導によって、ヒトミとヒトイヌの胸と股間がぴったりと合う。
（ほらほら、もっと気持ちよくしてあげる……！）
　ヒトミはさらに力を込めて尻尾を振り、ローターの動きを加速させる。端からみれば犬が激しく尻尾を振ってじゃれ合っているように見えるだろう。
「ウゥーッ……！」
　快感に翻弄されているのか、ヒトイヌがさらにうめき声をあげる。犬のフォルムを模した全頭マスクの下顎の部分が、ヒトイヌの動きに沿ってかぱりと開き、その奥に垣間見える口内が溢れた唾液でテラテラと光っているのがわかった。
（ふふ……気持ちよさそう……唇にキス出来ないのはちょっと残念かな）
　ヒトミはそう思いつつも、舌を伸ばしてヒトイヌの顔を舐める。当然ヒトイヌの顔は全頭マスクに覆われているため、ラバーの味しかしないのだが、ラバーフェチでもあるヒトミの気持ちを高めるにはちょうど良い行為だった。
（はぁ……はぁ……あぁ……そろそろ……はぁ……いっちゃいそう……！）
　荒い呼吸を繰り返しながら、ヒトミは快感の高まりを感じていた。ローターが直接身体に接しているため、それから感じる快感は当然ヒトイヌよりも強い。
　自分からじゃれつきにいった手前、まずはヒトイヌ側を満足させてやりたかったのだが、しっかりと全身が覆われているため、中々難しい。
（んんっ、あっ、ふあぁ……ッ！）
　悪いとは思いつつ、ヒトミは十分に高めた快感を味わい、身体を震わせて一度目の絶頂に達した。その身体の激しい震えに感化されたのか、組み敷かれたヒトイヌも軽く身体を震わせる。絶頂とまではいかなくとも、確かな快感を覚えたようだ。
　絶頂に達したヒトミは身体に力が入らず、下敷きにしたヒトイヌを押し潰してしまう。そうやって密着したことで、快感に震えるヒトイヌの震動がヒトミにもより強く感じられるようになった。
　この拘束や仕掛けに慣れているとはいえ、散々動かし続けたために、上手く肛門に力を入れることもできなかった。だらりと尻尾が垂れ下がる。
（はぁ……はぁ……ど、どいてあげないと……）
　人一人分の重みがかかってしまっているのだから、苦しいはずだ。こんな施設にわざわざフリーで遊びに来ている以上、苦しみには慣れているのかもしれないが、単に苦しいのは誰だって嫌だろう。
　ヒトミは絶頂直後で上手く力の入らない身体をなんとか動かし、ごろりと横に転がった。
　仰向けに寝転がったまま、呼吸を整える。身体を開いた

まま寝転がることになってしまうが、野外でそういう格好が出来るというのも、この施設の魅力のひとつだ。身体はラバーに覆われているのに、開放感を感じられるのはここくらいのものだろう。

そうしてヒトミが呼吸を整えていると、不意に彼女の視界に人影が割り込む。

はっとしてその正体を見ると、隣で寝転がっていたはずのヒトイヌがいた。

（あれ……？　さっきは立ち上がれてなかったのに……）

最初に転んだ際は別の理由で起き上がれなかったのかもしれないと、ヒトミは思った。無事起き上がれたのならそれに越したことはないのだが。

「ハッ……ハッ……」

そのヒトイヌは口を開いて荒い呼吸を繰り返している。唾液がマスクの下顎部分を伝って垂れ、本物の犬が涎を垂らしているかのような光景になっていた。

ヒトイヌは鼻先を擦りつけるように、ヒトミの胸辺りに触れてくる。

「ひゃっ……」

敏感になっている乳房を鼻先で突かれ、思わずヒトミは声をあげてしまった。そんなヒトミの様子に構わず、ヒトイヌがその口を大きく開き、その乳房を咥え込む。マスクにそこまでの力は出ないため、甘噛みのようなものだ。

過度に痛くはなかったが、乳房に噛みつかれている感覚は確かに感じられた。

ローターによって敏感になったその場所に、その刺激が心地よい快感を与える。

どうやらそのヒトイヌはヒトミに気持ちよくしてもらったお礼に、ヒトミを気持ちよくさせようと考えたらしい。

「くぅ……んッ」

さらにヒトイヌは舌を伸ばして乳首の辺りを執拗に舐め始めた。どろりとした唾液が乳房を覆うラバーにかかり、テカりを増してより煽情的な見た目にしていた。

ラバーに覆われたその乳房に舐める程度の刺激は、ヒトミにとって小さすぎた。

だが、乳房に噛みつかれ、舐められるという行為そのものに、ヒトミの気持ちは昂ぶる。

（もっと……もっと舐めて……っ）

犬とじゃれ合っているような、そんな気持ちになってヒトミはさらに刺激を求める。

身体をすりつけるように、そのヒトイヌはヒトミに身体を寄せてきた。

互いに不自由な身体同士、ひとしきり戯れる。

そうこうしている内に、不意にヒトミの首輪が小さな電子音を奏でた。

（残念……時間かぁ）

ヒトミはあくまでこの公園に遊びに来ているのであり、その利用時間が近付いていることを首輪の電子音は教えて

いた。
　それは相手のヒトイヌもわかっていることなのか、それまで擦りついてきていた身体を離し、ひっくり返ったヒトミが自由に動けるようにする。
　ヒトミは慣れたもので素早く四つん這いの姿勢に戻ると、遊んでくれたそのヒトイヌと鼻先を擦りつけ合う。言葉は発せられないため、挨拶代わりだ。
（楽しかったわ……また、会いましょうね）
　同じヒトイヌとまた会えるかどうかはわからない。そもそも個人が特定できないようにマスクを被っているのだから、次に会った時同じヒトイヌかどうかはわからないのだ。ヒトミの方はまだ髪型くらいは推測できるが、相手のヒトイヌの方は全頭マスクで髪の色すらわからない状態なのだから、恐らく次に会ってもそのヒトイヌなのかどうかわからないだろう。
　それでも、またこの公園内で再会できることを祈って、ヒトミはそのヒトイヌと別れた。
　慣れた道のりではあったが、そのままだとまっすぐ向かったとしても時間をオーバーしてしまいそうであった。
　そう考えたヒトミは、公園内に張り巡らされているヒトイヌ用の通路を使うことにした。
　道の脇にある四つん這いでなければ入れない場所に、トロッコ列車の駅がある。その扉の横の壁に設置されたスイッチに鼻先で触れれば、さほど待つということもなくトロッコがやってきた。
　その中にヒトミが乗り込むと扉が閉まり、あっという間に出入り口の施設に到着した。
　ヒトミがトロッコから降りると、女性職員のひとりがヒトミを待っていた。
「おかえりなさいませ。それでは更衣室にご案内します」
　ヒトミはヒトイヌだが、公園の利用者であり、れっきとした客だ。
　人によっては『ヒトイヌの時はそういうものとして扱われたい』という者もいるが、ヒトミはそういう申請をしていないため、普通に一利用者として扱われている。
　ただし、無用の混乱を避けるため、更衣室までの道では首輪にリードを着けるのがルールだった。本当に引くわけではなく、形だけのものだがこの短い間だけは主人が出来たようで、特に主人を求めていないヒトミもプレイの一環として楽しんでいる。
　職員に案内されること暫し、ヒトミは更衣室にたどり着く。その部屋の中に入って、職員にひとつひとつ器具を外してもらった。
　しばらく折り曲げた状態を続けていた手足を伸ばしたり曲げたりして、血を通わせる。急に立ち上がると立ちくらみを起こすため、ヒトミはしばらく床に座り込んだまま体の調子を確かめていた。
　最後にアイマスクが外されると、ヒトミはただの裸の女

性に戻る。職員にタオルを羽織らせてもらった。
「それではお疲れ様でした。もし何かお体に不安な点がございましたら、お気軽にスタッフをお呼び出し下さい」
職員は丁寧な一礼をし、部屋を出ていく。器具を外してもらった以上、あとはヒトミひとりでも出来るからだ。
ヒトミはのんびりと身体を休ませた後、立ちあがって自分の服が納められたロッカーを開く。
そこに収められていた自分の服に着替え、どこにでもいる一般女性に戻ったヒトミは、キャップを目深にかぶり、ヒトイヌ公園を後にした。
（そういえば……あの公園、拘束具はほとんどラバー製よね。四つん這いにならなきゃいけないし、難しいのはわかるけど、縄での拘束はダメなのかしら）
あまり個性的な外見では個人の判定が容易になり、難しいという理屈はヒトミも理解していたが、出来れば縄拘束もやってみたいと思っていた。
ラバー拘束に比べて解放感は一際あるであろうと考えられたし、何より彼女は縄拘束が好きだった。
（今度公園に要望として出してみようかしら？）
ヒトイヌ公園は、そういう利用者からのフィードバックを大切にしている公園だった。
次に遊びに行くときが楽しみだと、ヒトミはひとりの人間として、また日常に帰っていく。

あたしとさっきまで遊んでいた犬が遠くへ去って行く。寂しさを堪えて、その背中を見送って――目が覚めた。
見慣れた自室の天井、薄暗い部屋が目の前に広がる。
「……変な夢」
妙にリアルで、けれど現実味は全くない夢だった。
夢の中で自分は一匹の犬だった。どこまでも広がる草原を歩いていると、別の犬が現れて、その犬と戯れた。
それだけの夢。
けれどいままで生きてきた中で、人間以外の動物になる夢は初めて見た。それまでそんな夢を見た覚えはなく、そういう夢を見るようなことを前日にした覚えもない。
「……うーん、なんか思い出しそうなんだけど」
身体を起こし、溜息を吐く。なんだかもやもやしたものを胸に感じた。
けれど結局その正体がわかることはなく、仕方なくいつも通り朝の準備を始めることにした。治験に参加しているからなのか、最近は身体の調子がすこぶる良かった。
特に朝のお通じが最近快調で、ともすれば便秘気味だったのが信じられないほど順調だった。
さらに、少し恥ずかしい話ではあるのだが、出すのがとても気持ちいいと感じてしまうようになっていた。もちろん前から排泄の快感自体はあったのだけど、それだけでは

ない気持ちよさを感じるようになっていた。
出したあと、秘所がうっすら濡れていた時は正直動揺したけど。
いまのところそれ以外に変化はなかったし、悪影響といえるほどの影響が出ているわけではなかったから、とりあえず受け入れている。
「どういう薬かいまいちよくわからないけど……色々調子がいいのは助かるなぁ」
不思議と体力もついてきたように感じていた。
治験のバイトの時は毎回寝ているだけなはずなのだけど、どこか身体が引き締まってきたようにも感じる。
「実は、めちゃくちゃ好条件のバイトを見つけちゃったのかも……？」
怪しげなバイトだと思っていたが、こんなにも好影響を及ぼすとは思っていなかった。
機嫌良く朝食を作っていると、不意にスマホが震えた。
画面を覗きこむと、どうやら友達の律からのようだ。
「んー……？　あらら。あの子、また金欠なのね……」
次の休みに遊びに行こうと誘った子から『お金がないから無理！』という返事だった。
彼女はあたし以上の遊び人で、一緒によく遊ぶのだけどあまりに遊び過ぎるせいですぐ金欠になる子だった。
これまでの経験上、そろそろ金欠になる時期だったのでダメ元だったのだけど、どうやらダメだったようだ。
その時、ふと思いついたことがあった。
「……あのバイト、律に紹介できないかな？」
割が良くて、身体にも良い。
そんな素晴らしいバイトを、律にも教えてあげたいと思った。万年金欠の彼女なら、食いついてくるだろうし、それでお金に余裕ができれば、一緒に遊べる回数も増える。
「よーし、さっそくまだバイト募集していないかどうか訊いてみよう！」
それはとてもいい思いつきに思え、さっそくバイトの連絡先に問い合わせしてみることにした。
あたしと同年代の子にバイトを紹介したいと相談したらあっさりと面談してもらえることになった。
律も治験のバイトは経験したことがあるらしく、「やるやる！　めっちゃ割いいけど、最近は募集がなかったんだよね！　トオルっち、サンキューッ！」と非常にノリノリだった。
紹介してから思ったけど、活発な律には寝ているだけのあのバイトは退屈だったかもしれない。
まあ、すぐ眠くなって意識飛ぶし、問題ないよね。
「……それで、二人同時なわけね。はあ……」

男性職員は深々と溜息を吐いた。そんな男性職員に対して女性スタッフが慰めるように声をかける。
「日程を分けるべきだったかもしれませんが……ふたりとも薬との相性が抜群でしたし、タイミング良く人出不足の日でしたから」
人手ではなく、人出。ヒトイヌ公園の利用者が少ない日という意味だった。それを補うためのバイト募集である以上、ふたりが知り合いであったとしても、同時にヒトイヌになってもらうのは自然な成り行きだった。
「俺たちの都合は置いておいて。連れてこられた方は怪しげなバイトだと思わなかったのか？」
「思ってもないみたいでしたねぇ。よほど友人を信頼していたのか、あるいは元々深く考えない子なのか……」
女性スタッフは困り顔で首を傾げる。男性職員は再度深いため息を吐いた。
「……まあ、神経質な奴より、大ざっぱな性格をしている奴の方が具合はいいしなぁ。……わかった。俺も深くは考えないようにして作業するよ」
彼の目の前の作業台の上には、仲良し女子大学生ふたりが、全裸で横たわっている。健康的な肢体を晒したふたりは穏やかに眠っており、目を覚ます気配はない。
すでに何度かヒトイヌとして使わせてもらっている鈴木トオルの方はともかく、水奈島律の方は友人であるトオルにここを紹介されて、今回初めてヒトイヌとなる。
ある程度は、こういった者が出ることを期待しての一般バイト募集ではあるのだが、それにものの見事に引っかかった彼女たちに苦笑いせざるを得なかった。
黒いゴム手袋を身に着けた男性スタッフたちが、さっそく彼女たちに処置を施していく。
野良のヒトイヌに装着させる器具は同じものであることが多いが、今回は少し変わった器具も用意されていた。
「あれ？　今回はこんなん使うんですか？」
「……さすがにまずいのでは？」
「確かに。これを使うってことは、片方は……」
口々にいう男性スタッフたちに対し、男性職員は苦い顔をして首を横に振る。
「ふたりとも処女じゃないのは確認済みだ。それと、俺だってあんまり気は進まないが、上からのお達しでな。それを使っているところを利用者に見せろとさ」
「……なるほど、野良を新しい『遊び道具』の呼び水として使うのですね」
「でも、いまは人出不足なんじゃ……？」
見せる相手がいないのならやる意味が薄いのではないかと言いたいのだろう。言葉を濁す男性スタッフに対し、男性職員は肩を竦める。
「まったくいないわけじゃないのと、ぜひあれを見せたい相手が来てるんだとさ。まあ、動画にもするらしいが……ほれほれ、無駄口叩いてないで装着してやってくれ」

やれやれ、と首を振りつつ、作業を急がせる。上層部の意向に振り回されるのは、いつも彼らのような現場作業員なのだった。

ヒトイヌ拘束を施されていく二人の女子大学生を見ながら、彼は心の中で呟いた。

（後に影響は出ないように気を付けているから……まあ、運が悪かったと思って諦めてくれ）

男性職員は彼女たちに指示を出すパソコンを用いて、新しい行動プログラムを作り出していた。

その日、鈴浦夏芽はヒトイヌ公園をのんびりと歩いていた。いつものヒトイヌ拘束姿ではなく、人間として服も来ているし、二本の足で歩いている。

その表情は少し暗いものだった。

「はぁ……まさか体調不良でヒトイヌ入場を拒否されるとはね……うかつ……」

最近大学のレポートにかかりきりになって、ヒトイヌ公園に来ていなかった。それがひと段落つき、ようやく楽しめると思ったのだが。

どうもレポートを提出するために前日も徹夜していたのが良くなかったらしく、ヒトイヌ入場を禁じられてしまったのだ。

無論、夏芽もヒトイヌプレイが非常に負担のかかることであることは理解している。体調不良を理由にヒトイヌ入場を拒否されるのは仕方ない。

遠方から来た彼女を気遣って、特例かつ格安で一般入場できるようにしてくれたのもありがたい。

だが、やはりようやくヒトイヌプレイが出来ると思って来ただけに、夏芽の落ち込み具合は相当なものだった。

（……いつまでも落ち込んでちゃダメよね。ある意味貴重な経験なんだし……せめて今日は人としてヒトイヌたちの様子を）

そんな彼女の足元に、不意にすり寄ってくる気配があった。驚いて夏芽が足下を見下ろすと、どこから現れたのか、厳重にヒトイヌ拘束を施された一匹のヒトイヌがすり寄っていた。

「ひゃあッ！？」

驚いて声をあげてしまったが、それも無理からぬことだろう。先ほどまで近くに誰もいなかったはずなのに、すぐ傍にヒトイヌが現れたのだから。

跳ね回る心臓を抑えつつ、夏芽はそのヒトイヌに対し、大きな声をあげてしまったことを詫びる。

そのヒトイヌはむしろ驚かせて申し訳ないというように小さく啼いた。

夏芽は膝を突き、ヒトイヌの頭を撫でてやる。

（そ、そういえば受付の人が言っていたね……）
気持ちよさそうに目を細めるヒトイヌを、羨ましく思いつつ、夏芽は受付で言われたことを反芻する。

「女性がひとりで一般入場するのは珍しいので、ヒトイヌの方から近づいてくるかもしれませんね。……いつもヒトイヌになっておられる鈴浦様ならおわかりいただけるかと思いますが、やはり安心感が違いますし」

必ずしも女性の方が安全というわけでもないが、それでも近づいていきやすいことは確かだ。
特に夏芽はキツイ見た目をしているわけでもなく、どちらかといえば話しかけやすいと言われる。
こうしてフリーのヒトイヌが構ってもらおうと寄って来ても不思議ではない。
（あ、近くにトロッコの入口があったのね）
ヒトイヌの移動手段であるトロッコの乗降口が夏芽の歩いていた道のすぐ傍にあった。そこからこのヒトイヌは出てきたのだ。突然出現したカラクリは判明した。
夏芽は人懐っこくすり寄ってくるヒトイヌの頭や体を優しく撫でてあげながら、ふと既視感を覚える。
（ん……？　このヒトイヌ……）
以前、休憩所で出会って遊んだヒトイヌに似ているような気がした。
（髪型とか、雰囲気が似てる……？　そういえば拘束の形もあの子と一緒……いえ、まさかね）
そんな偶然があるわけがない、と結論付けた夏芽は立ちあがった。
「ええと、それじゃあね？」
別れるつもりで手を振って歩き出した夏芽だったが、そのヒトイヌは夏芽についてくる。思わず足を止めた。
「……ついてきたいの？」
「クゥン……」
口枷を噛んでいるからだろう。そう縋るように啼かれると、お人よしの夏芽に無碍にすることはできない。
「……わかった。一緒に散歩しよっか」
「クウンッ！」
嬉しそうに夏芽の周りをクルクル回る。ふりふりと揺れる尻尾が左右に激しく降られていた。
「ふふっ、危ないよ？　……そうだ」
夏芽はポケットに入れていたものを取り出す。
それは赤いリードだった。一般入場するなら必要になるかもしれない、と受付の職員に渡されたものである。
「せっかくだからこれを着けてもいい？」
「ワウゥッ！」
キラキラとした目を輝かせ、ヒトイヌの彼女は首を縦に振る。
（あー、わかるなぁ。フリーだと憧れるよねぇ）

夏芽はご主人様になりたいわけではなかったのだが、相手の立場に立って考えれば、一時的にでもリードを引いてくれる相手が出来るならそれは嬉しいことのはずだった。
「リードを引くのに慣れてないから急に動いたりしないでね？　なるべく首は締まらないようにするから」
「ウウ、ウウ」
心得たとばかりにヒトイヌがこくりと頷く。こういう時は本物の犬と違って意思の疎通が取り易くて助かる。
言うべきことを言った夏芽は、ヒトイヌの傍に再びしゃがみこみ、その首輪に手に持つリードの先端を繋ぐ。
ヒトイヌの彼女は嬉しそうに尻尾を振りながら、夏芽の頬にその犬型のマスクで頬ずりした。
「ふふっ、くすぐったいよ」
いま出くわしたばかりなのにやけに懐かれているような気がしたが、ヒトイヌも様々だと夏芽は納得する。
中々懐かない犬もいれば、出会った当初からすごい勢いで懐いてくる犬もいるのと同じようなものだ。
立ち上がった夏芽は、リードの持ち手側を軽く手に巻き、不格好に垂れ過ぎず、かつ、すぐに伸ばせるように気を付ける。
「それじゃあ、行こうか」
「クゥン！」
尻尾をふりふり。顔の上半分も見えているからというだけではなく、ヒトイヌの感情表現力が巧みだった。
（私も見習わないとなぁ……でも、これだけ激しく尻尾を動かしているってことは……）
連動して動く彼女の内側の機械もまた激しく動いているだろう。それに対して、そのヒトイヌが怯んだり感じたりしている様子はなかった。
（表に出さないようにしてる？　いえ、そう思って見てみるとちょっと顔も赤いし、腰が動いてる……）
時折、堪えきれずにか腰がぴくりと動いていることに、夏芽は気づいていた。
（すごいなぁ……）
思わず羨望の眼差しを向けてしまう。いまは一時的でも彼女のご主人様なのだと、すぐに気持ちを切り替えたが。
そうして歩くことしばらく。
夏芽とヒトイヌは、芝生エリアの近くの東屋にたどり着いた。
そこでは、先客が休んでいるところだった。
「あら……こんにちは」
穏やかな声に、艶やかな黒髪。まさに大人の女性というべき落ち着いた様子の女性。
その足下に、ヒトイヌの女の子がうずくまっていた。
「こ、こんにちは。……えと、その子、大丈夫ですか？」
具合でも悪くしているのかと心配する夏芽に対し、女性はニッコリと笑顔を浮かべて見せた。
「ええ。心配してくれてありがとう。ちょっと遊び疲れて

休んでいるだけなの」
そういって足元のヒトイヌを撫でる女性。
その発言を肯定するように、うずくまっていたヒトイヌの女の子は何気なく起き上がり――夏芽と別のヒトイヌがいることに気づいて驚きに目を見開いた。
「ひゃっ……！」
声を上げて女性の影に隠れる。
どうやら犬型のマスクはしているが、口枷はしていないのだと夏芽は察する。
怯えて隠れてしまったヒトイヌを、女性が優しい手つきで再度撫でる。
「大丈夫よ、大葉ちゃん」
「幸さん……」
大葉、と呼ばれたヒトイヌは、幸と呼ばれた女性に撫でられているうちに落ち着いたらしく、恐る恐る幸の身体の影から出て来た。
そして、夏芽の連れているヒトイヌに近づいて来て、その鼻先と鼻先を軽くぶつけ合う。ヒトイヌ同士、交流しているようだ。
「私たちがいうのもなんだけど、女の子のご主人様は珍しいわね」
ヒトイヌはヒトイヌ、人は人、ということなのか、幸が夏芽に話しかける。
「あー。いえ、私はこの子のご主人様ってわけじゃないんですよ……本当はヒトイヌ入場するつもりだったんですけど、体調の問題で」
「あら……そうなの。それは残念だったね」
「この子とはさっき会って、一緒に行動しているんです。……そちらはパートナーの関係みたいですね？」
「ふふふ。交代でご主人様とヒトイヌをやっているのよ」
夏芽はその言葉で、幸たちを以前に見かけたことがあったことを思い出した。軽快にボール遊びをしていたので印象深かった彼女たちだ。
「もしかしてボール遊びで――」
夏芽がそのことを聴こうとした時。
彼女たちのいる東屋の前の芝生エリアに、二頭のヒトイヌが現れた。
ヒトイヌがいること自体は普通のこと。
ただ、彼女たちの興味を惹いたのは、そのヒトイヌのペアが自分たちと同じように、女性ふたりの組み合わせだったからだ。
「今日は珍しい組み合わせに良く会う日ね……」
幸が呟く前で、二頭のヒトイヌは芝生エリアの真ん中へと移動していく。
二頭のヒトイヌは夏芽と一緒にいるヒトイヌとも、大葉とも違い、身体に厳重な拘束を施していた。
目の部分までアイマスクに覆われており、前がちゃんと見えているのかも怪しい。

外から肌が見えている部分がひとつもなく、相当暑くて苦しいのではないかと心配になるほどだ。
「ん……？　あれ？」
ふと、夏芽はヒトイヌたちの厳重な拘束の中で奇妙なものがあることに気づく。
ヒトイヌたちが「彼女たち」であることは、丸みを帯びた体つきや、ラバースーツの上からでも十分わかる胸の膨らみなどをみれば自明のことだった。
ただ、それにしては奇妙な物が、片方の股間に見えたのである。
（あれ、ペニ、ス……？）
棒状のものが片方のヒトイヌの股間から伸びていた。それはまさに男性のもののように、屹立して存在を主張している。
混乱している夏芽に対し、幸は落ち着いたものだった。
「えっと、すみません。あれって……」
夏芽が恥を忍びつつ尋ねると、幸はあっさりその正体を教えてくれた。
「ああ、あれは……ペニスバンド、ね」
どうやら幸はその存在を知っているようだ。もしかするとプレイにそれを用いたことがあるのかもしれない。
「ふたりともヒトイヌ状態では使ったことないわね。ヒトイヌ状態だと自由度が減るし……なにより、あれだと片方が片方を責める一方通行になっちゃうでしょ？」
バンドの構造によっては、装着する者も快感を味わえるよう、装着者の体内にバイブやディルドを埋め込むタイプもあるが、快感を得られるだけでは意味がない。
「だから私たちは交代でヒトイヌになって、ご主人様側がヒトイヌ側をしっかり気持ちよくさせるのに徹するようにしているの」
不公平がないようにというふたりの取り決めである。
「なるほど……」
そんな風に夏芽たちが話している間に、ヒトイヌたちはさっそくそのペニスバンドを用いて、疑似交尾を始めていた。片方のヒトイヌがもう片方のヒトイヌに背後から圧し掛かり、ペニスを後ろから突き入れている。
「……気持ちよさそう」
思わず夏芽は小さく呟いてから、慌てて口をつぐんだ。
幸い、他の者の注意は交尾するヒトイヌに向いていて、夏芽の呟きに反応するものはいない。
ヒトイヌ公園では男女のパートナーが野外でセックスしている姿は普通に見られる。そういう時には近づいたり話しかけたりして邪魔をしないのがマナーだ。
今回の場合は、見える位置にやってきて交尾し始めたのだから、夏芽たち側がこの場を離れる必要はない。アイマスクの視界的に気づいていないという可能性もあったが、見られたくないなら開けた芝生エリアには来ないだろう。
（見せつけるプレイ……かぁ。気持ちいいのかなぁ）

野外でヒトイヌプレイをしに来る夏芽ではあるが、見られる快感はあまり理解していない。
ただ、今回に関してはヒトイヌたちが気持ちよさそうに腰を振っているために、気持ちいいのだろうということだけはわかってしまった。
思わずここまで一緒に歩いたヒトイヌに視線を向けてしまう。ヒトイヌは食い入るように二頭の交尾を眺めていて夏芽の視線には気づかなかった。
（あの二頭みたいに……って、何考えてるの！）
このヒトイヌとはあったばかりで、幸と大葉のような関係でもない。散歩と交尾は違いすぎる。
馬鹿な考えを一蹴しつつも、ヒトイヌ同士の交尾に興味を惹かれる夏芽は、ヒトイヌ同士の絡みを真剣に見つめるのだった。

目の前の犬に腰を打ちつける度に、じゅぷりじゅぷりと奇妙な水音が響く。
自分が犬となって犬と交尾をしている、しかも自分は雄犬役だなんて、普通に考えて発狂物のことなのに、あたしはどうしてかそれを自然と受け入れていた。
どうでもいいことを気にするよりも、少しでも早く腰を動かしてもっと気持ちよくなりたいという気持ちの方がはるかに強い。
「ハッ、ハッ、ハッ」
口から自然と荒い呼吸が噴き出す。口を大きく開けて吐き出す息は熱く、出す度に代わりに吸い込む空気が冷たくて心地いい。
挿入している相手の犬は、体勢的に背中しか見えなかったけど、その犬もまた大きく口を開いて荒い呼吸をしていることが伝わって来た。
のしかかるようにして触れている背中からは、互いの体温が伝わってより熱情を高める一助となっていた。
（あ、ああ、もう、いっちゃいそう……ッ）
性的絶頂を迎えたことはそう多いわけではないけど、経験がないわけじゃない。いままでオナニーや彼氏との性交で迎えてきた絶頂より、はるかに気持ちいいことだけは確かだった。
「「ウ、ウゥーッ！」」
あたしが激しく絶頂すると同時に、折よく下の犬も絶頂してくれたようだった。
絶頂と同時に自分の身体の中に挿し込まれていたものが急速に小さくなる。射精すると男性のものが小さくなるというくらいの知識はあったけど、自分の中にあるものが小さくなるというのはどういうことだろう。
不思議に思っている間に、小さくなったものはあたしの身体の中から引き抜かれていく。
なぜ引き抜かれていくのか。

完全にそれが引き抜かれた時、いつのまにか立派なものを股間に勃起させている雄犬が反転してきた。
一瞬前まで、メスだったはずなのに。それに対するあたしも、オスではなくメスになっていた。
（本当に……変な夢……）
そこからは、考える余裕がなくなってしまった。
雄犬に押し倒され、仰向けに空を仰ぐ。圧し掛かってきた雄犬にペニスを挿入され、その太さに身悶えた。
とても入らないと思ったけど、ペニスはとても柔らかくあっさり私の中に入って来た。雄犬が腰を前後に動かし、掻き回すように体内が抉られる。
犬に犯されている。
けれど、嫌悪感が湧かないのはなぜだろうか。
まるでその雄犬のことが、気を許した親友みたいに感じられるのは、なぜだろう。
雄犬のストロークが早くなり、そんなことを考える余裕もなくなっていく。
力強く、しかしどこか優しく、自分の身体の中を雄犬の逞しいものが満たしていく。
それが頂点に達した時、再びあたしと相手の犬は絶頂を迎えた。さっきもそうだったけど、オスの絶頂の証である熱い液体は出ていないみたいだ。
不思議に思って絶頂の余韻に浸っていると、あたしの中に挿し込まれているものが、いままで以上に太くなる。
自分の中で大きくなるものに驚いている間に、相手の犬はあたしから身を離す。
あたしの身体にオスを残して、その犬はまたメスとなっていた。

目の前で繰り広げられる信じがたい光景に、夏芽たちの視線は釘付けになっていた。
彼女たちの目の前では、二頭のヒトイヌが交互に責め役を交代し、互いに責めあっている。
「……あのペニスバンド、もしかして新しい道具？」
そう呟く幸に、大葉がテンション高くすり寄る。
「幸さん幸さん！　次来る時はあれ使ってふたりともヒトイヌになろうよ！」
ヒトイヌの状態の時は極力人の言葉は喋らない。
公園における基本のマナーであるが、それをうっかり失念するほどに大葉にとってあのペニスバンドは魅力的だったようだ。
「こら、大葉ちゃん？」
そんな大葉に向け、幸が苦笑しながら嗜める。それを受け慌てて「わんわんっ」と誤魔化しているのを、夏芽は微笑ましく思い、聴かないふりをしていた。
それ以降はちゃんと喋らないようにしていたが、幸は表情や仕草で正確に言いたいことを理解したようだ。

幸は立ち上がって大葉の首輪にリードを着けると、夏芽に向かって挨拶をする。
「それじゃあ、私たちはこれで。あの道具について受け付けで訊きたいから」
「あ、はい。幸さん、色々教えてくださってありがとうございました」
「また公園内で会えたらよろしくね。……まあ、次はお互いどういう状態かわからないけど、ね」
「ふふっ、わんわんっ」
幸の足元で、ヒトイヌ状態の大葉が笑いながら、同意するように吠えた。
次に会う時、幸と大葉がどういう状態にあるかはわからない。幸がヒトイヌになっているかもしれないし、もしかするとふたりともヒトイヌになっているかもしれない。
そもそも、夏芽の方もどうなっているかはわからない。
基本的には一期一会であるヒトイヌ公園だが、夏芽は幸と大葉なら次に出会ってもわかるような気がした。
幸と大葉は仲睦まじく、寄り添いながらその場を去って行った。
残された夏芽とヒトイヌは、どうしたものかと目線を合わせる。
「ええと……とりあえず、移動しよっか？」
「ウー」
こくりと頷いて同意したため、夏芽はヒトイヌを連れてそこを離れる。
ペニスバンドを用いての交尾遊びを続ける二頭のヒトイヌは、夏芽がその場を離れた後も、ずっと交互に責め合っていた。
（やっぱり、ヒトイヌ公園はすごいなぁ……）
夏芽はそうしみじみと思っていた。
成り行きで一般入場をしてみた途端、公園内での広がりが一気に広がった。
この調子で繋がりが増えて行けば、公園内での楽しみも増えるかもしれない。
これからも公園に来るのが楽しみだ。

のら？の場合　おわり


ヒトイヌ公園
発行おめでとう
ございます！ たまっこ

あとがき

本作をご購入いただき
誠にありがとうございます

初めて本格的に同人誌を作りました。
今回はダウンロード販売のみですが
いずれは各イベントなどにも参加して
みたいと野望を燃やしております。

初めての同人誌の作成でお世話に
なった方々に感謝を。

特に挿絵を担当していただいた
たまっこ様には無上の感謝を
捧げさせてください。

ヒトイヌ公園はまだまだ書きたい
エピソードが山ほどあります。
どういう形になるのかまだ不明ですが
今回を上回る物をお届けしたいと思います！

それではまたどこかで！

奥付

「ヒトイヌ公園」

サークル名：ヤマタノサクラ

小説：夜空さくら
挿絵：たまっこ

発行：2018年9月1日

問い合わせ、感想、ご意見はツイッターへ
（夜空さくら：@yozorasakura）

◯無断転載・WEB上へのアップロードは禁止です。